の平和」を手に入れる日が来るのなら、みんなで歌い合える日を、僕は待ち続けています。

つながる命

第一中学校　一年
半藤穂香

私はよく祖父の家へ行く。一か月に一度は私の家族と祖父母と共に昼食を食べる。妹と絵を描くなどして遊ぶこともある。私は仏壇のある部屋で妹と遊んでいた。すると、なぜか壁に掛けてある二枚の写真と目が合った。一枚は女の人、もう一枚は男の人の写真だ。よく見ると、女の人の写真より、男の人の写真の方が若いと思った。なぜなのだろう。祖母に質問し、答えてもらった。

写真の若い男の人は、曽祖父で私の祖父の父だ。曽祖父の仕事は、新聞の従軍記者だった。曽祖母と結婚し、祖父が生まれた。その後、まもなく仕事のため、戦争中のフィリピンのルソン島へ行った。激しい戦いの中で、曽祖父はマラリアという病気で亡くなった。その時、祖父はまだ二歳だった。自分の父親の事をあまり覚えていないと言う。小さな祖父と曽祖母は、闇市で食糧を買い、周囲の人々や親戚の助けを借りながら生活していたという。話を聞いているうちに、昼食の時間が近づいてきた。私は、昼食作りを手伝い、料理をテーブルに置いた。椅子に祖父母と私の家族が座った。そして、

「いただきます。」

と言うと、祖父が話しだした。祖父がまだ小さかったころの昔話だ。毎回聞いてはいるが今回は、じっくり聞こうと思った。

「おじいちゃんが小さかった時は、闇市で米や野菜を運んで食べたことがよくあったなあ。小学一年生の頃、給食はずっとパンだった。この頃の食べ物は味がなく、おいしいとは言えなかった。今の子供はおいしい物ばかり食べられて、うらやましいぞ。感謝して食べないとだめだぞ。」

聞いてみると今食べた物が、よりおいしくありがたく感じた。戦争中や戦後は、食べ物が少なかった。祖父の父が三十一歳で亡くなってしまったのだから、きっと生きていくのが大変だったはずだ。比べてみると私は、父も母も両方の祖父母もいる。毎日おいしいごはんと給食を食べられる。この幸せな生活ができていると思うと感謝しないとだめだ。私は

「ごちそうさま。」

と手を合わせながら心を込めて言った。

戦争が思っていたよりも身近だと感じた私は沼津市の戦争史跡巡りのツアーに参加した事を思い出した。橋には大きな空襲痕があり、あちこちに忠魂碑があった。戦争で使う武器の工場やソナーで相手を見つけるための実験場があった場所など、戦争に関係する所を巡った。なかでも戦争中に疎開した建物を見た時は、とても驚いた。学校みたいな造りになっていて、二人部屋くらいの広さの部屋がいくつかあっ

た。だが、二十人用の部屋と聞き自分なら狭すぎて絶対に三か月も暮らすことはできないと思った。自分の親に会えないのも悲しい。私は戦争中に生きていけないだろう。そういえば、広島の平和記念資料館に行ったことも思い出した。資料館には、人類で史上初めて落とされた原子爆弾について展示されていた。ランドセルに、具の入った弁当箱、新しい靴などが真っ黒になっていた。写真は見ただけで涙が出るものもあった。何万点もの写真や絵、言葉があり人々の生きていた証が残っていた。きっと熱くて痛かったのだろう。もし、爆弾が落とされなければと思うと涙が止まらなくなってしまう。そう考えているうちに家に帰る時間になった。

夕食中にテレビを付けると、今も戦争が報道されている。戦争は、命を奪う争いだ。大切な人を亡くし、悲しい思いを抱えている人も大勢いる。幸せな未来を破壊する戦争と命について全世界が考えてほしい。そう思いながら曽祖父から私に命がつながったこと、今日も幸せに生きることが出来たこと。おいしく三食食べられたことに感謝した。私は布団に入り、戦争が世界から無くなり皆が幸せになるように願い祈りながら、そっと目を閉じた。

「平和」とは

第一中学校　二年
長澤幸芽

この夏休み、家族旅行で沖縄に行ってきた。沖縄といえば、すぐにでもきれいな青い海で泳ぎたくなるところだが、僕はその前に行きたい場所があった。「ひめゆり平和祈念資料館」だ。

僕は戦争を体験したことが無いため、戦争のことはあまり知らない。もちろん、もう二度と戦争があってはならない。しかし、今の平和な生活があるのは、過去に戦争があったからだというのも事実だ。だから、もっと戦争について知りたいという気持ちがあった。

ここでは、ひめゆり学徒隊の戦時中の様子を知ることができ、遺品、写真、生存者の証言映像も見ることができた。

ひめゆり学徒隊とは、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の教師と生徒で構成され、主に負傷兵の看護や治療の手伝いをしていた。驚いたのは、生徒は十三歳から十九歳だったということだ。

戦争が始まるまでは、普通の学校生活を送っていたようだった。授業ノートも展示されていたが、数式も書いてあったり今の僕たちと同じような勉強をしていた。楽しそうな集合写真もあった。それなのに、戦争によって生活が一変してしまった。

戦争中は寝る間もなく夜も働き続け、食料も一日一個のおにぎり（ピ

ンポン玉くらいの大きさ）だったという。

当時の日記がたくさん展示されていて、いくつか読んできた。壕の中は暗く、死体の臭いや汚物臭が漂い、とても臭かったという。その中で脳症の兵士は暴れるし、近くに置いてあった尿も飲んでしまったという。手足を切断された兵士は包帯を巻かれていたが、包帯は血とウジ虫で汚れていて、包帯を変えてほしいと訴えてきたという。日に日に兵士たちは痩せていき、血を栄養にしたウジ虫は太っていったそうだ。死んでしまった兵士を二から三人で外へ運び火葬することまでしていたという。壮絶すぎて、途中で読むのを止めてしまった。

沖縄戦も後半戦になり、米軍の攻撃が迫ってくると、ひめゆり学徒隊に解散命令が出た。解散といわれても、逃げる途中で爆撃にあうかもしれないし、米軍に捕まるかもしれない。ひめゆり学徒隊は半数以上の人が亡くなったが、多くは解散命令後に亡くなったという。

「捕虜になるくらいなら死んだほうがまし」という教えを受けていたそうで、集団自決もあったそうだ。

生存者の証言では、「死にたかったが手りゅう弾が無かった。針を飲めば死ねるかなどを考えた。手りゅう弾を持っていたら死んでいたと思う。」と言っていた。

生きるため逃げるか、または自ら死ぬか、僕たちと同じくらいの歳の子がこんな選択を迫られるなんて、とても考えられない。

今、衣食住になんの不自由もなく生活できていることは、あたり前ではない。しかし、この生活が幸せだと感じるのは、難しいことだと思う。平和について考えたことがないことが平和であるということなのだろうか。

今の幸せを噛みしめるために、戦争の悲惨さを後世に伝えていくことが、その時代を生きた人たちへの恩返しになると思う。

そんなことを考えながら、慰霊塔の前の献花台に献花を置き、手を合わせた。

「平和の国」の住人として

第二中学校　三年
伊藤愛莉

日本は、「平和の国」である。正確に言えば先進国の一つとして、平和を訴え、行動に移さねばならない国なのだ。

今年の春、人生で初めて広島へ行った。自前でつくったしおりを片手に人ごみをかき分けて、路面電車に乗り込んだ。すると突然、おじいさんに声をかけられた。「どこから来たの？」父が「静岡です。」と答える。よく来たねというような会話をした。車内にいる日本人が私達とおじいさんくらいしかいなかったから話しかけてくれたのかもしれない。けれども、見ず知らずの人に声をかけてくれるなんて、なんて広島の人々はあたたかいのだろうと感心した。

まず私は、原爆ドームに行った。原爆ドームでは多くのピースボランティアが観光客に説明していた。地方中枢都市である広島は今も昔

も様々な会社や施設が立ち並び、多くの人々が行き交う都市である。私が原爆ドームと広島の街をみて、驚いたことがある。それは、被爆した都市が再生し、活気に満ちていることではなく、もう二度とおこらない、おこらないでほしい「あの日」から、懸命に立ち上がろうとした人々の苦しみがエネルギーとなって感じられたことだ。この上に広島は、今の日本はある。だから、原爆ドームは、どんなに高いビルがあっても、どんなに時を経ても変わらず存在しつづけるだろう。だってそれは、私たちの「平和の国」のエネルギーの中心だと思うから。

季節のせいか、桜の花びらが風に舞っては、ひらりひらりとおちていく。私は近くのコンビニでおにぎりと団子を買い、元安川のほとりでプチ花見をした。食べながら、ガイドの話がよみがえってくる。「ドームの中にいた三十人は即死、周りの建物や人々は一瞬にして吹き飛び、川には『暑い』と言いながら死んでゆく無数の人の姿。」想像してはいけない。けれど、水面に落ちてゆく桜の花びらをみるだけで息苦しい。自分が死んだことも分からず亡くなった人、川にとびこんだとき、なにを思ったのだろう。熟思してしまって、やるせない気分になる。周りの笑い声がやけに響いて聞こえ、はっと我に返った。

次に平和記念館に行った。妹がひたすら「怖い、怖いの」と聞いてくる。（被害にあった人に怖いはないだろう。）と思ったけれど、妹のトラウマを作る訳にもいかないので「気分が悪くなったら、教えて。」と言った。実際私の方が、途中で吐き気がしてきて危なかった。中でも特に目を引いたのが、子供たちの遺品だ。中には、自分と同い歳の子もいた。展示してある写真と目が合ってドキッとした。「まだまだ、これからだったのに。」そう、言っているようにも聞こえた。自分の体が死に向かっていく恐怖と現実をみても、懸命に生きようとしたのだろう。

外に出ると、少し気分が良くなって、公園内で桜と日本国旗の写真をとった。戦争を反省し、日本という国がなくならず、私の祖国が日本で本当に良かったと心から思わせてくれる。それから平和記念碑の前で手を合わせていたら、「どいてください」と声が掛かる。何とオーストリアの国会議員が献花に訪れてきたのだ。外交官と何やら話をして、丁寧に花を置いた。自分のとなりに百九十センチメートルはあるだろう、大きな人が、しかも異国の国会議員がいるという経験は金輪際ないだろう。そうか、世界中の人々が核について考えてくれているのは一つの希望なんじゃないだろうか。

私は、この旅行を終え、多くのことを学び、決意した。五月下旬には、G7サミットが行われた。このサミットの意味はものすごく大きい。そもそも、国連やG7、G20は平和を維持しなければ在り続けられない。

日本は「平和の国」である。平和を訴え、行動に移す使命を負っている。その思いを、世界と共有し、アピールするために。日本は世界で唯一の被爆国だ。核、戦争、原爆は怖いだけですむものではない。日本が〝唯一〟の被爆国であるという事実は永遠に変えてはならない。この世に生まれてしまった以上、私達が正しく知り、行動しなければならないのである。人類はコロナを乗り越え、いままでの生活を取り戻した。ただ恐れ、差別するのは止めて、多大な犠牲の上に新しい道

をつくった。平和も核もきっとそうだ。私達は正しい情報を見極め、学び、思いを受けついでいかねばならない。そして何より、自分らしく行動していく必要がある。

子どもたちそれぞれの戦争

第二中学校　三年
若林実和

私はこの夏に『子どもたちの8月15日』という本を読んだ。この本は子どもの頃に戦争を体験した三十三名の方が、昭和天皇に一九四五年八月十五日を振り返って書いた文章が収録されている。戦争中の生活や疎開の体験、八月十五日の人々の様子、戦争や平和に対する思いなどが記されている。

私はこれまで学校の授業や教科書、本、テレビ番組などから戦争のことを知ることがあっても、当時、生きていた一人一人の生活や思いを詳しく知る機会は少なかったように感じる。私はこの本を通して、戦争は戦地で直接戦わない人にも大きな影響を与えてしまうことを学んだ。

ある子どもたちは、空襲を受けて逃げているときや敗戦を知った後などに「自分は死んでしまっても仕方がない」「いつ自分は死ぬのだろうか」と考えていたそうだ。アメリカ兵が自分の町に来たら自殺しようと本気で考えた人たちもいた。子どもは周りにいる大人たちの考えや社会の価値観から大きな影響を受ける。子どもたちが戦争による自分の死を意識するようになったのは、周囲の大人たちがアメリカの捕虜になるくらいなら自殺しなさいと言っていたことなどの影響があったと考える。この本に体験を寄せた人たちは当時小学生くらいの年齢の子どもだった。兄弟や近所の子どもから空襲や戦争の話を聞き恐怖を覚えた子どもたちもたくさんいる。子どもたちが「生きたい」と考えるのも死が怖いと思うことも当然のことだと思う。戦争は沢山の人の命や暮らしを壊すだけでなく、子どもや若い人たちからも生きる希望や夢を追いかける自由を奪った。

また、戦時下の暮らしの中では当時子どもたちが日々を生きていくこと、食べ物を得て命をつなぐことで精一杯だった、ということが書かれている。この本の中でも大半を占めているのが「食」の話だ。食料の配給の少なさ、芋や豆だけを食べる生活でいつも空腹だったこと、もらった白米がどれだけ美味しかったか、近所の飼い犬の肉を食べたこと、物々交換によって高価な着物が食料に変わっていく悲しさ、庭で育てた野菜が実る喜びなど食料を得ることがどれだけ大変だったかが綴られている。一方、食について困った記憶は一切ない、という人もいた。一概に戦争の体験をしたといっても住んでいた場所や年齢によって戦争から受けた影響は本当に様々であることを知った。子どもたちは、戦争の不安を抱えながらも友人との関係で悩んだり、通えなくなった学校の机に忘れてきたはちまきが惜しかったり、友人の家で友人と一緒にご飯をこっそり食べたことが親にバレないか恐れていた

り、必死に生きていたのだ。

八月十五日に敗戦を知った人たちの感じ方も人それぞれだった。教科書では敗戦を知り泣き崩れている人の写真をよく目にする。しかし悲しんだ人もいれば、日本が負けると勘づいていたため特に驚かなかった人や、もう兵隊にならなくてよい嬉しさや空襲に怯えなくてよい安心を感じていた子どももいた。全員が敗戦に悲しさだけを覚えたわけではないということだ。置かれた場所や立場、年齢の違いによって、敗戦への感じ方もそれぞれ違いがあった。最後まで日本は勝つと信じていた子どももいたが、日本は負けるだろうと言っていた祖父、敗戦後日本は負けると思っていたと言った母、戦争も末期だろうと感じた子どもなど、生活の苦しさなどから日本の敗戦が近いことを肌で感じていた人たちもいた。国家による統制によって情報が正しく伝えられていなかった時代にも、与えられた情報を鵜呑みにせず自分で考えて社会を見ていた人たちがいたことに驚きを覚えた。

残念ながら日本は自ら戦争の道に進み、戦争を起こした国である。広島や長崎への原子爆弾投下や敗戦の経験を通して、戦争はしてはいけないと日本は学んだ。戦争を起こしたことを反省し続け、二度と戦争をしないためには、私たち一人一人が平和を作っていくこと、社会の動きを知り、きちんと考え、戦争の道に進まないようにすることが大切だと思う。これから私は戦争について学び、情報を正しく知り、自分の考えを持ち、小さなことでも行動を起こせる人になりたい。

悲劇を繰り返さないために

第三中学校　一年
石水心渚

第二次世界大戦が、一九三九年九月一日から一九四五年九月二日までの六年余りに渡って続きました。今から七十八年前です。この戦争によって、当時の世界の人口の二・五パーセント以上の人が被害者となったそうです。私は、この戦争でたくさんの人たちが亡くなったことを知って、とても悲しかったです。戦争をこれから先も経験することなく、平和に生きていきたいと思うようになりました。私が考える「平和」は、世界中の様々な人たちが仲良くすることです。そのためには、お互いを差別せずに理解し合い、思いやる心をもつことが大切です。嫌なことがあったとしても、話し合いで解決できたら良いなと思います。

私の祖父母は、戦争が終わってから生まれたそうです。だから、自分が調べようとしない限り、当時の様子を知る機会がほとんどありません。私に限らず、今の若者の祖父母の世代は、戦争を知らないどころか戦後生まれになりつつあり、身近なところに戦争体験者を見出すことは難しくなっていると思います。戦時下、人々はどのような暮らしをしていたのでしょうか。調べてみると、男性はほとんどが徴兵され、女性も工場で働かされていたようです。戦地へと徴兵されていく

男性に代わり、農業や軍需工場での労働など様々な職場に動員されることになった女性たち。国民の生活は、戦争中心の生活に切り替えられていきました。子どもたちは、「戦争は良いことだ。」「相手は悪い国だ。」と教え込まれ、武器の使い方等を学んでいたそうです。自由に発言したり、行動したりできなかったことを知り、今では考えられない生活にとても恐ろしくなりました。私は戦争のない国に生まれ家族がいて、たくさんの友達と毎日楽しく生活しています。この「普通」の暮らしを、戦時下の人たちは願っていたかもしれません。いつ死ぬか分からない状況に怯えて、生活に不満を抱く余裕もなく、ただ生きることに必死な人たちが、当時はたくさんいたのではないでしょうか。

私は、ずっと「世界で唯一の被爆国になって、降伏して、日本はなんて可哀想なのだろう。」と思っていました。しかし、調べていくうちに、最初に手を出したのは日本だと知って、こちらにも非があるのではないかと思うようになりました。でも、戦争は良くないという考えは変わりません。たくさんの被害と悲しみが残り、誰も幸せにならないと思います。国同士が、互いに折り合いをつけることができて、戦争がなくなることを願っています。

この先の未来、日本も戦争が起きる可能性はゼロではありません。世界には現在も様々な理由により、各地で紛争が起こっています。その陰では、多くの子どもたちが犠牲になっています。彼らは兵士として戦闘と他者の殺害を強要されることもあり、心と身体に大きな影響を受けるそうです。紛争終結後も満足のいく教育の機会が与えられず、ふとしたことで暴力的な思想に染まってしまう恐れもあるのではないでしょうか。

悲劇を繰り返さないためには、一人ひとりが少しでも過去の戦争について理解することが大切だと思います。大切な家族や友達、そして自分自身を守るためにも、戦争をしてはいけないと、声をあげられる国民でありたいと思います。

平和を未来に繋げるために

第三中学校　一年
岩　元　七　珀

教室の画面に映し出された映像に、言葉を失いました。『はだしのゲン』は、広島に落とされた原爆によって多くの命が失われる中で、主人公が強く生きていこうとする姿を描いた作品です。アニメとはいえ、人々の笑顔が当たり前の生活が、一瞬で消えてしまう光景のリアルさに衝撃を受けるとともに、「戦争」の恐ろしさを改めて実感しました。

社会の授業で観た『はだしのゲン』がきっかけで、私は戦争について考えるようになりました。

（日本ではどんな戦争があったのだろう。）

と思って調べてみると、約八十年前に起きた太平洋戦争では、およそ三百十万人の日本人が亡くなったことが分かりました。そして、太平洋戦争末期の一九四五年八月六日には、人類史上初の原子爆弾が日本

に投下されました。『はだしのゲン』でも、原爆により、主人公ゲンの父や姉、弟が亡くなってしまいます。もし自分がゲンの立場だったらと思うとぞっとします。どうしたら良いか分からず、怯えて泣き喚く自分の姿が浮かんできます。しかし、ゲンは違いました。自分とともに生き残った母を連れて、安全な場所へ移動します。私よりも年齢の低い子どもが、自分の命だけでなく、母親の命まで背負って一生懸命歩く姿は、今も鮮明に思い出すことができます。自分たちのことで精一杯なのか、健気に進むゲンを助ける人は誰もいませんでした。命に優先順位はないと理解しているものの、やるせない気持ちでいっぱいになりました。

なぜ、このような悲劇が起きてしまったのでしょうか。相手国の立場になって考えてみると、原爆を投下することで、日本をできるだけ早く降伏させ、自分の国の犠牲者を少なくすることができます。さらに、世界で優位に立つことにも繋がるでしょう。私は、自分の国のことしか考えていない、あまりに自分本位な考え方だと感じました。相手の国よりも、自分の国の方が大切だという気持ちは分かります。でも、だからといって相手の国を攻撃することは、違うと思います。徒競走で自分が一番になるために相手を転ばせますか？　私だったら、相手を妨害する方法を考えるのではなくて、練習を重ねると思います。国規模の話なので、もっと複雑だと思いますが、お互いがお互いのことをもっと考えられたら、悲劇が避けられたのではないでしょうか。

原爆による主な被害は熱線と爆風だったそうですが、放射線は、終戦後かなりの時間が経ってもなお障害として残り、被害者の健康を蝕んでいるそうです。戦争の傷跡を、心と体に刻んでいる人々からしたら、終戦はないのかもしれません。日本は、戦争をしない、軍隊などを持たない、戦争する権利すら認めないということを憲法にしました。日本は、唯一の戦争被爆国なので、他の国にはできない被爆者の声を世界中に届けることができます。夏になると、ニュース等で当時の映像や平和についての報道がされ、意識を向ける機会があります。これからの日本を担う私たちのような若い世代は、一人ひとりがもっと世界に目を向けて、現在も起きている戦争に関心をもつ必要があると思います。

実際に経験していないからこそ、唯一の被爆国として平和について考え、未来に繋げていくことが、世界平和への一歩になると考えます。

私にできる第一歩

第三中学校　一年
梅内柚月

私は今、中学一年生だ。お腹いっぱいご飯を食べて、安心して眠ることができる。友達と楽しい学校生活を送り、幸せに暮らしている。授業で戦争について学習したり、映画やドラマ等で戦争を題材にした作品を観たりしても、どこかフィクションのように感じていた。戦争のない穏やかな日常。だから、家族旅行で広島の平和記念公園を訪れ

た私は、現実との違いに言葉を失った。

八月ということもあり、日差しが肩に食い込むような暑さだったが、平和記念資料館の中はひんやりと涼しかった。暗い館内には被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真、当時の資料がたくさん展示されていた。私は、戦時中、自分と同じ中学一年生も働いていたことに衝撃を受けた。現在の中学生や高校生を対象に行われた「学徒勤労動員」。働き盛りの若い男性が戦地に行くことになり、不足した労働力を補うために子どもたちが働き手となったそうだ。戦争末期には、学校の授業よりも働くことが優先されていた。原爆が投下された日も約八千人の生徒が外で作業をしていて、そのうち約六千人が亡くなったそうだ。同い年の子が国のために働き、原爆によって亡くなったなんて、信じられなかった。当時の人々は、死を身近に感じながら生活していた。いくら戦時中といっても、いつ死ぬか分からない状況で過ごす日々は、恐ろしかっただろう。黒焦げになった弁当箱や制服の残骸を見て、

（もし彼らがこの時代に生きていたら、穏やかな日々を送っていたのだろうか。）

と考えずにはいられなかった。一発の原子爆弾が無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えた。私は、戦争のことを何も知らなかった。戦争や平和というスケールの大きな言葉に気後れし、私ができることはないと諦めていた。この旅行で、「知る」ことがいかに大切か気付くことができた。知ることができれば、伝えることができる。そして、知った人が、また伝えていく。多くの人が平和に向き合い、次の世代まで語り継ぐためには、「知る」ことが必要だと思うようになった。

今の日本は、戦争が遠い昔のことになってしまいつつある。戦争を経験した人も高齢化が進み、私たちが「戦争」に関わる機会が減っている。広島や長崎、沖縄などでは幼い頃から戦争や平和について考えることができる「平和学習」という授業がある。私たちも「平和学習」の時間を設けるべきではないのかと思ったが、誰かが時間を設けてくれる、教えてくれることを待つのではなく、自ら知ろうとすることが主体的な「平和学習」だと思う。

広島の平和記念公園では、展示等について説明を行うピースボランティアという人たちがいた。平和記念資料館の来館者に解説を行うほか、個人やグループを対象に、資料館の展示や公園内の慰霊碑などを一緒に回る移動解説も行っている。私が平和記念資料館へ行ったとき、外国人の来館者も多くいた。知ろうと思っている人が、国内だけでなく国外にも多くいることを知った。ピースボランティアのように「伝えていく」活動があるのは素晴らしいことだと思った。

唯一の被爆国である日本。日本人である自分も知らないことばかりなのだから、海外の人々はそれ以上だろう。原子爆弾や戦争の恐ろしさを、世界中の人々が知れば、同じ悲劇を繰り返すことがなくなるかもしれない。

「平和」と聞いて、

（すぐに行動を起こすことは難しそうだ。）

（自分にできることはないだろう。）

と思うかもしれない。しかし、「知る」だけでも大きな一歩になると、

私は考える。

平和を願う

第三中学校　一年
木村　優衣加

最近、戦争により世界中で様々な影響が出ているというニュースを耳にします。苦難と人道危機がもたらされるだけでなく、世界経済全体が成長減速とインフレ加速の影響を受けるそうです。日本でも、ガスや電気の価格が上がりました。家で電気をうっかりつけっぱなしにすると、怒られてしまいます。そのとき、我が家は平和ではなくなります。新型コロナウイルスが流行したときを思い返すと、あの時期も平和とは言えなかったと思います。世界中では、今も私が知らないことや、理解できないことがたくさん起きています。「平和」は「戦争」だけで考えるものではないですが、戦地の人々の生活を考えると、悲しい気持ちになります。今なお世界で起きている戦争の原因も複雑で、情報を得たとしても、全てを理解することは難しいです。それならば、せめて私たちが毎日当たり前に感じている「平和」について考え直そうと思いました。

日本は、戦争をしないと憲法で定められている国ですが、他の国から一方的に戦争を仕掛けられたとしても、大丈夫なのでしょうか。不安な思いを両親に伝えると、

「平和と平穏は似て非なるものであり、関わり深いものだよね。」

と言われました。辞書で両親の言葉に出てきた「平和」と「平穏」について引いてみると、「戦いや争い、変わったことなどが起きず穏やかな状態」だと分かりました。世界では様々な理由で、「戦いや争い、変わったこと」が起きており、なかには四十年以上も続いている戦争もあるそうです。私たちがこうして生活している今も、多くの命が失われているのです。自分が知らない残酷な事実に、胸が締め付けられます。日本では、これからも「戦いや争い、変わったこと」が起こらないでほしいと思います。

日本は昔、戦争をする国でした。不景気な状況を何とかしようと、豊かな国へ攻め入ったことがあるそうです。自分の知らない日本の姿を知り、

（そんな時代もあったのか。）

と、不思議な気持ちになりました。第一次世界大戦によって、日本は大戦景気となったそうです。戦争と経済には深い関係があることは分かりますが、どんな戦争からも得られるものはないと思います。誰もが失うのが戦争ではないでしょうか。

先日読んだ本に、「生き物には狩猟本能と生存本能などあらがえない欲があるがゆえ、そもそも争いは必然であり、生きる手段であることも否定できない」と書かれていました。私は、そうであってほしくないと思いますが、その言葉を百パーセント否定することができない気持ちがあるのも事実です。歴史上記録に残る戦争や紛争を調べ上げる

と、その数は一万回以上にも上るそうです。戦争による総死者数が一億五千万人を超えてもなお、戦火はやみません。私は、人間が戦争に取り憑かれてしまっているように感じられます。

世界中には、様々な形で支援活動やボランティアが行われているそうです。また、国同士で条約を交わして戦争を抑止したり、防衛したりする取り組みもあるそうです。

今、私にできることは何でしょうか？　私はまだその答えに辿り着けていません。平和を願うことしかできないもどかしさを抱えながら、毎日を過ごしています。

一番の幸せ

第三中学校　一年
鈴木　ゆり

七十八年前の八月十五日、日本では一つの戦争が終わりました。毎年この時期になると戦争を題材にした番組がたくさん放送されます。多くの人にとって、戦争の悲惨さや平和の大切さを知り、知識を深めるきっかけとなっていると思います。二〇一七年には、特攻について考える番組が二時間にわたって放送され、大きな反響を呼んだそうです。生き残った特攻隊員の様子や遺族の証言など、リアルな声が取り上げられ、実際に基地があった場所をジャーナリストが訪れ、歴史を中心に解説していくという内容でした。

鹿児島県に住んでいる私の曾祖父と曾祖母は、子どもの頃に戦争を経験しています。きっと、今の私と同じくらいの年齢だったと思います。きっと母は当時の様子を聞いたことがあるだろうと思ったのですが、曾祖父は「思い出したくもない。」と、戦争の話は一度もしなかったそうです。曾祖母も、実の兄を戦争で亡くしています。戦争は終わっても、家族を失った悲しみはいつになっても終わることはないでしょう。「二度と戦争をしてはいけない。」と口にした曾祖母の顔に笑顔はなかったそうです。

鹿児島県の知覧町には、太平洋戦争末期、旧陸軍の特攻基地が置かれました。二百五十キログラムの爆弾を装着した戦闘機に乗り、敵の艦船に体当たりして沈める特別攻撃作戦が行われたそうです。パイロットは必ず亡くなるという「必死」条件の作戦でした。私と同じくらいの年齢の人たちが、国の勝利を願って、自分のたった一つの命を犠牲にするのです。知覧町にある知覧特攻平和会館には、若くして散っていった特攻隊の方たちの遺書が展示されています。

「笑顔で行きます。」

手紙に綴られていたのは、死への前向きな気持ちや、家族や友人への感謝の思いだったそうです。私には、手紙に書かれたことが全て本心だとは到底思えません。みんな本当はもっと長く生きて、楽しく過ごしたかったのではないでしょうか。特攻隊員のご遺体も、ほとんど残っていないそうです。海に消えた若者たちのことを思うと、胸が締め付けられます。

「平和＝戦争がないこと」という考えが、私自身を含め多くの人の中で当たり前となっていると思います。しかし、戦争を経験している人はどんどん減ってきています。私も兵士として戦ったことは無いし、紛争地帯で安全を脅かされながら生活したことも、安全を求めて他国へ避難したこともありません。そんな私たちが「戦争を無くせば平和になる」という思いのもとに行動を起こしてたどり着いた先の景色は、果たして実際に戦争で苦しむ人々の望む平和と一致するのでしょうか。

八月十五日に、戦争は終わりました。戦争が終わったからといって、国が平和になるわけではありません。犯罪はいまだに多く、毎日のように世間を騒がせていますし、地球規模での異常気象や、それによる災害によって苦しんでいる人は今も多くいます。でも、戦争がないだけで、笑って過ごせる日々は多くなっていると思います。

私は戦争によって失われた日常を知りません。しかし、当たり前のように朝が来て、ご飯を食べて、友達と笑い合い、学校で学び、温かい布団で眠る。そんな当たり前のようで一番の幸せが今あるということに感謝しなければいけないと思います。

私が思うこと

第四中学校　三年
大橋　真奈

終戦から七十八年。私は戦争について書かれた本を読み、戦争と平和について考えた。

戦争は多くの兵士、善良な市民までもの尊い命がうばわれるとても恐ろしいものだ。命がうばわれるだけではない。人間性をうばい、人を狂わせてしまう。自分の命を守るために多くの人の命を平気で見殺しにしたりできてしまうような心にもしてしまう。

今は、お腹いっぱいご飯を食べることができ、学校へ行って友達となにげない会話をし、笑い合うことができる。夜はあたたかい布団で寝ることができる。それが私の普通だ。けれど、戦時中は、食に飢え、強制労働が課せられ、毎日仲間や家族のだれかが死んでしまうかもしれない、もしかしたら今日、今自分が殺されてしまうかもしれないという極限状態の人も多くいた。

ある物語を読んで私は特攻隊を知った。特攻隊は敵に体当たりをして戦いを行い、戦死することが前提で戦いに行く。その頃日本男児はお国のために命を捧げ死ぬことが名誉とされていた。死ぬために生きていると言っても過言ではないと思う。私だったら、死ぬのだけだって怖いのに戦闘機に乗って体当たりして死ぬなんてもっての外だと思

う。戦争のためだけに生きているように思ってしまった。

今年は戦争について考える授業が多かった。国語では黒い雨を読み、原爆のおそろしさを知った。英語では、広島で被爆者ではないけれど戦争の悲しさを多くの人に伝えるために活動している人がいることを知った。さらに社会では多くの戦争について学び、学童疎開や学徒動員など庶民の生活のすみずみにまで戦争の影響がおよんでいてとても苦しい生活をしていたことを知った。きっと日本を動かす実権をにぎっていた人々も戦争はしてはいけないものだと分かっていた人もいたのに、なぜ戦争を始めてしまったのか、なぜ戦争の被害の大きさを予想できなかったのか、なぜ戦争はしてはいけないと言っていた人々に耳を傾けられなかったのか。なぜ多くの人の命をうばってでも戦争を続けなければならなかったのか。考えれば考えるほど疑問がわいてきた。けれど過去を変えることはできない。

日本は今は平和になっているが世界ではいまだに戦争をしている国々がある。便覧をペラペラとめくっていたら、ある写真が目にとまった。それは家族と思われる数名の人たちが手をつなぎ、戦火から逃げている。そしてその背後には戦車が写されている。なんとも衝撃的な写真だ。一人の女の子はいまにも泣きそうな顔をしているように見える。カラー写真のためより鮮明に見える。日本では到底見ることがないような画だ。贅沢をしているわけでもなにか人に恨まれるようなことをしてもないのに、最終的には市民も巻き込まれ多くの命がうばわれる。おかしいと思ってしまうのは私だけだろうか。

私たちはまず戦争について知ることが平和実現の第一歩なのではないかと思う。だから実際に原爆が落とされた場所や資料館に足を運んだり、戦争を経験した人たちのお話を聞いたりするなど戦争を知り、平和について考える機会を増やしていきたいと思う。

平和は「つくるもの」

第四中学校　三年
萩原　冬眞

町の至るところで爆弾が飛び交い、人々は我先に防空壕へ駆けていく。市街地は火の海で、うつ伏せに倒れて動かなくなった人もいる。みなさんは、このような光景を想像できるだろうか。

僕は中学一年生の冬に家族旅行として広島に行った。訪れた場所は原爆ドーム及び平和記念資料館（原爆資料館）と、戦時中に毒ガス製造拠点として毒ガスを製造し、秘密の島として地図から消された「大久野島」だ。

まず、原爆ドームでは、地面に落ちた瓦礫や、折れ曲がった鉄の骨組みが、原子爆弾というものの凄惨さを物語っていた。平和記念資料館では、原爆の放射線によって皮膚に異常が出た患者の写真や、黒焦げの弁当箱など色々な資料を見た。悲しい気持ちで資料館を出ると、そこには約八十年前に悲惨な出来事があったことを感じさせないような景色が広がっていた。

次に、大久野島は、野生のウサギがたくさんいるところとして知られていて、海外からの観光客も来ている。そこでは戦時中、戦争のための毒ガスが製造されていた。その過程で何人もの人が犠牲になったという。これを聞いて僕は、人間はたかが兵器のために人を殺したのかと愚かしく思った。また、大久野島には砲台も設置されていて、どれだけこの島が重要な拠点だったかということがよく分かった。学校の社会の授業で、第一次世界大戦頃から新兵器として毒ガスを用いるようになった、ということを学んだ。そのとき日本は直接戦争には参加していないが、その頃から毒ガスをつくっていたのかもしれない。

先日、人生で初めて、『火垂るの墓』という映画を観た。両親を亡くした兄妹が、自分たち二人だけで暮らし、最終的には二人とも亡くなるという途轍もなく悲しい物語である。僕は、観終わった時に、「こんなことが戦争中あったのか！」と衝撃を受け、言葉が出なかった。兄の方は中学三年生で、僕と同い年なのに、しかもあんな環境の中、よく食べ物を見つけて料理などができたなあと思った。僕だったら現実逃避していただろうとも思った。この映画のようなことが百年もしない前に、日本全国で起こっていたかもしれないということを考えると、恐ろしくなった。

ここで改めて、「平和」という言葉について考えてみることにした。辞書に載っている意味は、「戦争がない」「世の中が安穏としている」だ。僕の考える「平和」も同じようなものだが、世界的な平和ということについては「全ての人間が平等に、幸せな暮らしを送る」ということが付け足されると思う。しかし、そうなることはできるのだろうか。今は、ロシアによるウクライナ侵攻や、中東での宗教的な対立による紛争などがあり、必ずしも全ての人が幸せではないと思う。

テレビで、戦争に関する討論をしていた。発言の中に、「平和は自然にできるものではなく、つくるもの」という主旨の発言があった。僕はこの言葉に共感した。自然に平和ができるなら、苦労はしない。戦争も起こらない。原爆の投下や大久野島での悲惨な出来事が再び起こらないようにするためにも、私たちは努力していかなければならない。日本の戦争経験者が減っていく今だからこそできることがあるはずだ。僕もこれからは、「平和」について積極的に考えられるような人になりたい。

未来のために

第五中学校　二年
羽切良亮

燦々と照りつけるような陽光は、
何もかもを眩ませる閃光の中に消えた
微かに希望を唄うそよ風は、
皆の帰る場所と共に砕け散っていった
夏を生き小麦色に灼けた肌は、
白くなる程に生きて焚かれた

朝露が降りる大地の草叢(くさむら)は、
涙で犇(ひし)めく亡骸たちに変わり果てた
愚かな為政者の心を表すような黒い雨
無情にも無辜(こ)の民に降り注ぐ
爛(ただ)れる皮膚に抜け落ちる髪
光と雨を浴びただけなのに
誰か、水をください
子供の、命を返してください
無情にもその望みは叶わない
生き地獄に残された人たち
家族とは離れ、痛みからは離れられない
それだけじゃない
あだ名でからかわれて、
嗤(わら)われて、あしらわれて
一人一人強く生きている人々なのに
自由と平和を手に入れる権利が
全員にあるのに　どうして
どうして　どうして殺した
原爆をも作る頭脳を持っていながら
平和という可能性に気づけなかった者達
原爆にも負けず明日へと歩む人々を
偏見だけで嘲笑した無知な者達
だから僕たちは、唯一の被爆国の
凄惨な歴史を学んだ者として責任がある
次の世代に記憶を残していくこと
他の国に平和の意義を唱えていくこと
全ての人々が人として生きていくために
二度と戦争をしないこと
さあ、手を取り合おう
年齢を越えて、国を越えて
自由と平和が当たり前である
僕たちの未来のために、今動こう

今、できること

第五中学校　三年
臼井佑輔

一九四五年八月、原子爆弾投下。二十万人以上もの犠牲を出した痛ましい歴史的出来事。核の恐ろしさを学ぶ機会があったにも関わらず七十八年経った今、ウクライナ戦争におけるロシアによる核の脅威が高まっている。嫌でもテレビやネットニュースで目にする機会も多く、このことに目を背けるわけにはいかない。そのため十五歳の僕に何ができるだろうかと考えてみた。

そのためにまず、歴史や国際関係について知り、そこから核兵器の

脅威や平和の重要性を理解するところから始めようと思った。色々と調べていくと、その中に、広島・長崎の原子爆弾投下は、正しかったという意見があることを知った。正しい、正義、何を言っているのだろうかとびっくりした。正義か悪かではなく、論を俟たずして否なのではないか。歴史の授業で原子爆弾投下の恐ろしさを学習したばかりだったからかもしれないが、肯定できる根拠がどこにあるのかと違和感を覚えた。肯定派の意見は、原爆投下は戦争を終わらせるために必要だった。でなければもっと多くの人が命を落とす事になったと必要悪を主張していた。また核の存在は戦後の平和につながったとも主張していた。そんな意見に対して、なんて身勝手なのだろうかと怒りを覚えた。どんな理由があるにせよ、なんの罪もない二十万人以上もの人を一瞬で死に至らしめた行為を肯定できるはずがない。そんな意見があるからかもしれないが、今まさにウクライナとロシアの戦争で核の脅威が高まってきている。使用すれば甚大な被害をもたらすことは誰でも知っているのに。言葉は乱暴だが、おばかなのかしら？　と思ってしまう。

クリミア半島合併による関係の悪化、またウクライナが欧州連合（EU）に接近したこと、それを好まないロシアとのさらなる対立、その他にも歴史や文化、民族的・歴史的な要因が対立を助長しているとのことで、おばかで片付けられるほど、単純ではなさそうだ。むしろどちらが正しいのかと言うのではなく、正義ともう一つの正義が主張し、戦っているようにすら感じる。もしかすると正義の反対は悪ではなく、もう一つの正義があるのかもしれない。そしてその境界線はグレーで、さらに怒りや憎しみなども混ざり、より複雑化させてしまう。平和の大切さ、人の命の尊さは揺るぎないが、どこか自分との距離感でその重みが変わっているように僕は感じる。自分との距離が最も近い家族や友達などの命はとても重いが、少し距離が離れた別の町、他国の平和や命は、距離とともに軽くなってしまう。頭では理解しているが、その重みは異なってしまう。ある物事を人種単位で捉えたり、こういう人だと決めつけたりすることは、危険で強いては戦争のきっかけになると思う。

今回、この平和作文を書くにあたり、いろいろな角度から平和について考えてみたが、平和というテーマはとても大きく、自分になにが出来るのか、何をすべきかと一歩踏み込むと、とたんに躊躇してしまう。でも色々と調べると違った側面では、もう一つの正義があって、そのことを深く理解する事が重要であり、平和の一歩に繋がるのではないかと感じた。

核の脅威を政治的な手段として交渉のカードにするなど、社会は複雑だと感じる。だからこそ、十五歳である今、シンプルにとらえる視点やアイデア、そういった考え方、声を生徒会や地域のイベントなどで機会があれば届けていきたいと思う。平和な未来を紡いでいけるように、今自分にできる小さな一歩を躊躇せずに踏み出せるよう努力していきたいと思う。

戦争の怖さ

金岡中学校　二年
古屋　美咲

私は中学二年生のこの夏に鹿児島県に行った。そのわけとは大きくわけて二つの目的があり、一つはまだ一度も行ったことのない鹿児島県での観光。もう一つは鹿児島県南九州市知覧町にある「知覧特攻平和会館」で戦争について実際に目で見て考えを深めたいという思いからだ。

この場所は第二次世界大戦の時に編成された特攻に関する資料がたくさん展示されていて、中には特攻隊員の写真や服、戦闘機の模型なども展示されていた。

私はこれまでに戦争について、テレビやインターネット、本などでは見たり聞いたりしたことはあったが、実際に戦争に関わりのあった地へと足をはこんだことはなかった。

館内に入った時、周りの空気が変わった気がした。

初めに入ってすぐにあるビデオを見た。それは特攻とはどういうものなのか、この特攻作戦にはどんな人が行っていたのかというような内容だった。

私は特攻とは爆弾を付けた飛行機が、パイロットが乗ったまま、敵の船に体当たりをする攻撃だということをそこで初めてはっきりと知った。この戦争がおこっていた時からまだ百年もたっていないのにもかかわらず、この特攻作戦で亡くなった人の平均年齢が二十一・六歳、特攻作戦で亡くなったいちばん若い人の年齢はわずか十七歳という今の高校生や大学生と同じ年ごろの人たちであった。この作戦によりすべてあわせておよそ四千人もの人が命を落とした。

私は胸が痛んだ。なぜそこまでして戦わなければならないのか、なぜ未来ある若者までもが戦争によって命を落とさなければならなかったのか。どんな理由があろうとも人の命にはかえられないとその現実があったことに悲しみでいっぱいだった。

次に館内のさらに奥に進むと壁一面に特攻隊員の顔写真がはられてあった。そのすぐ下には隊員たちが記した手紙があった。多くは母や父、兄弟などの家族に向けての手紙。中には同じ隊員への手紙と思われるものもあった。きっと私が想像もできないくらい辛いだろうに、そのどれもが自分が辛い、苦しいなどという言葉は入っていない。今まで育ててくれた家族を心から感謝し気遣い、全力で戦って参りますという意気込みの言葉だけのつまった最期の手紙だった。今の私にはどう表現すれば良いかわからない感情になった。でも、私があと四年後に家族と分かれ命をかけて戦うなんて到底できないことだというのだけはよくわかった。

次に隊員たちの写真をよく見に行った。私はこの場所に来るまで隊員はみんな顔の表情が険しい顔の写真ばかりだと思い込んでいたため、ここの写真を見ておどろいた。ここにある隊員たちの写真には、今の人たちとなんら変わりのない、自然な笑顔が浮かんでいた。

私はこの知覧特攻平和会館で大切なことをたくさん学ぶことができた。それは、今私が学校やこういう歴史を学ぶことができること、そして誰にも私たちの将来は決められておらず、自分で未来をきりひらくことのできるこの環境が戦時中と比べものにならないほどありがたく、ましてやその幸せがあたりまえになりつつある現代がどれほどめぐまれているかを、目で見て本当に感じることができた。だから、今のこの地球上にもまだ戦争の続く国があることの深刻さがわかり、また罪のない命がうばわれてはいけないと強く思った。

七十八年目の終戦記念日

大岡中学校　一年
鈴木　絆那

私は、今年の八月十五日に祖父母と一緒に過ごしていました。昼食中十二時になったとき、町内の放送で低い音の「ウゥー」というサイレンが部屋中に鳴り響きました。初めは何のサイレンかわからなかったので、おどろきましたが、母から

「このサイレンは終戦の日を知らせるために鳴っているんだよ。」

と教えてもらい、終戦七十八年目を迎えたことを知らせるサイレンだということがわかりました。その時、一緒にいた祖母に目を向けると、静かに目を閉じ、手を合わせ黙とうをしていました。祖母は終戦後に生まれ、戦時中の経験をしていませんが、どのような気持ちで黙とうをしていたのか気になったので後で聞いてみると、

「毎年終戦の日になるたびに黙とうをしているよ。今の日本が平和でよかった。これからも平和が続いてほしいと願って黙とうをしていたんだよ。」

と話してくれました。私は今まで、昔、日本で起こった戦争について深く考えたことはなかったけれど、祖母が黙とうをしているのを見て、昔、日本で戦争が起こったということを改めて実感しました。

日本は、七十八年前の終戦を迎えるまでどのくらいほかの国と戦争をしていたのかを調べてみると、一度ではなく、何度もほかの国と戦争をしていたことを知りました。私の住む沼津市では、一九四五年の第二次世界大戦で大空襲があり、都市面積の八十九・五パーセントを焼失し、二百七十四人の死者が出る被害を受けました。

それから七十八年間、戦争が起きることなく平和に過ごせていることは当たり前ではなく特別なことだと思います。

今も世界では、戦争をしているところがあり、特にロシアとウクライナの戦争は、毎日のようにテレビのニュース等で目にします。ロシアは、自国民を守るための方法はウクライナに侵攻をするしかなかったと主張しているようです。ロシアも自国が正しいと思って侵攻を始めたと思いますが、武力を使うのではなく、もっと相手の国と話し合いを重ねて対話で解決できる道がなかったのかなと思いました。

国同士だけでなく、自分の身近なことで考えてみても、人を傷つけることは決して許されません。自分の意見と相手の意見が異なった場

合も、相手の意見をよく聞きながらコミュニケーションをとること、思いやりの心を持つことを積み重ねていくことが争いを引き起こさないことにつながると思います。また、コミュニケーションをとっていく中で、自分の過ちに気付けることもあるかもしれません。

一人一人が対話を繰り返し解決していくことを意識していけば、いずれは国同士の問題にもつながっていくと思います。

これから先、一日でも早く国同士の争いが対話によって解決されることを強く願う七十八年目の終戦記念日でした。

あの日の記憶を鮮明に

大岡中学校　一年
矢澤　愛菜

「あの時は、本当に怖かったよ。私は広島県とは離れた山梨県に住んでいたけれど、それでも何かが起こったことは分かるくらいの大きなしょうげきだった。しばらくすれば、悲鳴が何度も聞こえてきた。原爆が落とされたその瞬間に全国民が恐怖の色に染められたんだ。」私がまだ小さかった頃、ひいおばあちゃんがこう教えてくれました。その時は理解もそこまで出来なかった私ですが、それでも鮮明に記憶に残っています。戦争を語りつぐということはそれほど大切で絶対に途切れてはいけないバトンなのです。誰もがこの苦しみを知った上で、生き続けていかなければいけないのだと強く思います。

私は六歳の時に広島県へ旅行に行き、原爆ドームを見ました。もう七年も前の記憶になりますが、それでもはっきりと覚えていることがあります。それは、原爆が落とされた直後の被害の広まり方です。平和記念資料館の一室に、原爆投下の瞬間の様子が小さな模型となり再現されていました。炎を表す赤いライトは瞬く間に広がり、市内全てを焼きつくしてしまいました。また、炎が届いていない場所でも非常に強力な原爆放射線が放たれ、被害範囲は三・五キロメートルにも及んでいました。他にも、戦場へ向かった兵士たちの遺書やボロボロになった戦とう服など戦争の被害が展示されていました。

私はこの経験を通して戦争の被害の大きさを痛いほど実感しました。世の中に知らされている情報の十倍は悲惨な状況であることを少しでも多くの人に知ってほしい。そして今自分にできることを一生懸命に行ってほしい。と、考えるようになりました。なかなか、知る機会も少なくなってしまっていますが、七十八年の月日の中でこんなにも情報がデタラメに教えられてしまっているのです。戦争をしたことは決して無駄なことではないはず、今もこうして受けつがれて多くの人の勇気になっているのだから、少しでもあの日のことを鮮明に伝え続けられてほしいです。

もし、平和をあの日の苦しみを私たちが忘れてしまったらどうなってしまうのでしょう。きっと互いへの思いやりの気持ちがなくなり事故やいじめなどが多発し、日本は壊れてしまうことでしょう。ほんのささいなことですが、私たちの生活は平和で成り立っているのかもし

れません。だからこそ、無くならない戦争や私生活での嫌がらせ。人ごとだなんて思わずに、親身になって耳を傾けてあげてください。自分だったらどうしていただろう、自分には何ができるだろう。考えるだけでも良いから、そんな思いやりが必ず誰かの希望になるから、多くの人が平和と向き合い一人ずつできることを行ってほしいです。誰か一人の平和でもいいから、救ってあげられる人が増えていくことを願っています。

最後に、平和とは何なのか考え直してみて一人でも多くの人の心からの笑顔が輝けば本物の平和と言えるのだと私は考えます。苦しんでいる人全員とは言いません。あなたのとなりにいる一人でいいんです。戦争時代の兵士たちの死を無駄にしないように、多くの人たちが平和と戦争と触れ合って多くの考えが大切にされる時代になっていってほしいです。また、沢山の話を聞いたり平和についてこれからも調べ、新たな知識や理解を深めていきたいです。そしてこれからは、私も平和な世界へ向けて少しずつ貢献していきたいです。

なんのために生まれたの？

大岡中学校　二年
鏡　啓　真

「ぼくは、戦争を憎む」
やなせたかしは言った
「戦争ってなに？」
僕は言った
二人の間にある壁を想像してみる

戦争は家や街を破壊する
兵士は敵をたくさん殺す
そもそも敵って誰なんだ
名前も知らない憎くもない
そんな人をどうして殺せるんだろう
戦うことで大切な人を守る
とか言うのだろうか

平和なときは人を殺せば罰を受ける
それを正義と信じているのに
平気でいられるわけがない

命は一つしかないのだから
「一人」を失って得る勝利に
一体なんの価値があるのだろう

僕が本当に望むこと
大切な仲間と好きなスポーツをすること
おいしいものを食べること
くだらない話で大声を出して笑うこと
それが奪われたら
生きる意味ってあるのだろうか

「なんのために生まれて
　なにをして生きるのか
　こたえられないなんて
　そんなのはいやだ！」

銃声ではなく
正義の味方の歌がこだまする日を
今日も迎える

戦争から考えられる事

大岡中学校　三年
藤井　希

私は、最近「戦争」について、深く考える時間が増えました。今年のゴールデンウィークには、戦争の歴史についてもっと考えを深めたいと感じ、平和公園や原爆資料館へ行きました。

まず、原爆資料館へ行き目に入ったのは、廃墟に立つ女の子の写真です。右手に火傷を負い、苦しい表情だという事が分かり、一瞬にして闇に包まれたように私も苦しい気持ちになりました。展示されている文や写真を見ているだけでも苦しい感情に押しつぶされそうになるのに、被爆された方の気持ちを考えてみようと思うと辛くてたまりませんでした。

資料館内を歩いていると、当時子供達が着ていた服や物、人々の頭蓋骨がずらりと並んでいる写真が強く頭に残りました。服は血痕が残りボロボロで、必死に生きようとした。自分達は頑張って生きていたんだ。というメッセージを遺族の方々に残しているようでした。私よりも小さい子供が、私よりも幼い年で亡くなっている、命を奪われてしまったという事実を資料館で目の当たりにした私は、不真面目に生きてきた自分を見直しました。

資料館で最も苦しさを覚えたのは、被爆された遺族の方らしき人が

涙を流しながら写真を見ていた事、そして、小さな子供がお母さんに「僕は死にたくない」と言っていた事です。亡くなってしまった方に資料館へと会いに訪れ、嗚咽をもらし帰っていく方々や、わずか四歳程の小さい子供が写真を見て発言するなど、その場にいた私も思わず泣いてしまいました。広島や長崎の街を二つの爆弾で消してしまったという事は一生許してはならない事だと思いました。また、最近では汚染水を海に流すというニュースがありますが、その事から海外の政府の方々が、日本産の魚等は食べない。など反対意見が多いと感じ、戦争や争い事があってしまうと、色々な事へと紐付けられてしまい、また次の争いへと発展してしまうと考えました。私は、資料館で学んだ、第二次世界大戦での出来事を起こしたくありません。また、同じ人間同士で幸せや家族を奪い合いたくもありません。戦争という争い事を起こさないためには、選挙権を持った方々が、選挙権を持っていない未来を生きる子供など、自分がより良い暮らしをできるように、政治に関わる方法を真剣に考える事が求められると思いました。私には選挙権というものが無いため、未来を選ぶ事ができません。また、まだ私が知らない大人の事情や世界が沢山あります。だから、戦争や平和について若い時からもう一度知る必要があると感じられました。そうする事で、今までの戦争での出来事から学び、武力で解決するという形になりにくいと考えました。

選挙以外では、最近小学生も読む、小説が沢山増えていると感じました。戦争の話を読みやすくし、小学生や中学生へと届けるという方法も、戦争を自然と知る事ができ、人の記憶に残す事ができると思いました。平和を忘れないために、難しい言葉等が簡単にされている本を読むと、分かりやすいと思いました。私の小学校では戦争の本が置かれていたため、色々な戦争の出来事を図書室で知ることができ、戦争が怖いという事を、本を見て知った人もいました。小学校低学年では、実際の写真をみせてしまうと、ショックを受けすぎてしまう子もいると思いますが、昔にこんな事があったんだよ。という事を伝えていくのが平和へつながるのではないかと私は考えました。

これらの貴重な体験や考えた事を忘れず、次の世代へ伝え、一人でも多く苦しむ方を減らしたいと思いました。

平和の実現について

愛鷹中学校　二年
鈴木　美樹

日本では、戦争の影は遠のき教育内容の一環として残るようになりました。「平和」もある程度実現し、私もそれに慣れてしまっています。

今や戦争は遠い昔の出来事となり、とても遠い存在と化しました。しかし現在も戦争やテロが起き、飢餓や貧困など様々な問題が生じ苦しんでいる人々もいます。これらの問題を解決することは、容易ではありません。冒頭でもあったように、私たちの世代にとって戦争は程遠い世界の話であり、「平和」は抽象的でスケールの大きすぎる問題と

言えます。

私が初めて「平和」について触れたのは、原爆資料館へ行った時でした。被爆した人々が着ていた衣服や爆風で肉が爛(ただ)れた人の写真など、それまで当たり前のように平和な世界を安全に過ごしてきた私にとってはとても衝撃的な光景でした。その後、小中学校での学習を通し自国の歴史や課題だけではなく、国外問題についても理解することができました。〝平和に慣れる〟ということはとても幸運なことではありますが、それに目が眩(くら)み戦争という黒い歴史を忘れてしまっていると感じました。これらのことから私はまず、戦争や貧困などの課題を〝課題として〟認識するためにも、充実した教育による知識や技能が必要だと考えます。戦争やテロの要因は誰かが決めつけた結果などではなく歴史や背景が複雑に絡み合った結果なので、それらを理解しなければ解決するのは難しいと思ったからです。また、教育で得られるのは正しい知識や技能のみではなく、思考力や心の豊かさを生むことができ、周囲と良い関係性を築く基盤となります。

このように充実した教育を受けることは、正しい知識や技能によって社会問題へ取り組むことに繋がります。異文化とのコミュニケーション能力を高めたり、日本のように過去の惨劇を繰り返さないために未来へと伝承したりしていくこともできます。また、思考力等によって協調性や共感力を身に着け、お互いに理解を深め合うことにも繋がります。これらの取り組みはすぐに達成するものではありません。先進国の支援が必要な場合など、国単位の取り組みになることが多いと思います。結局「平和」について一般人である私たちができるのは自分自身が行動し、身近なことから変えていくことのみです。ただし、ある程度安定した環境下で充実した教育を受けることができている私たちは、思考力の豊かさを身に着け、相手の立場や考えを理解し尊重し合うことができるはずです。

私は結果的にはこういった義務教育で教わるような知識や技能、道徳的なことこそが重要になるのだと思います。平和な社会の実現のために、まずは自分自身に与えられた教育の権利をしっかりと行使していきたいです。

平和へ繋がるはじめの一歩

愛鷹中学校　三年
岩本彩良

「原爆投下は、戦争を終わらせるために必要だった。」みなさんは、そのような考え方があることを知っていますか。夏になり、原爆や戦争についてのニュースが飛び交う中、新聞に書かれていたこの言葉に私は衝撃を受けました。日本に、原爆を投下したアメリカの世論調査では、国民の半分が原爆投下は、終戦を早めることができた自国の功績として認識している。という結果があります。また、驚くことに日本でも平成二十七年の世論調査で、原爆投下を正当化する声が四割ほどあり、被爆地である広島県の方が全国平均よりもアメリカに同情す

る声が多く、許しがたいと答えた人の割合を上回ったというデータがあります。私はこのようなデータを知って、とても驚きました。メディアでは、原爆によってもたらされた悲惨な出来事が度々取り上げられており、私は、日本は被害者的立ち位置だと認識していたからです。正当化するにはどういう理由があるのだろうと、とても疑問に思いました。

そもそも、なぜ原爆が日本に落とされてしまったのか。私は学校で、日本がポツダム宣言の受託を一度断ってしまったからだと学びました。この理由なら、原爆投下は仕方なかったと考えることもできます。ですが、もし、アメリカがわざとポツダム宣言の内容を日本が受諾しないような内容に変更していたとしたら。アメリカは原爆を投下することで自国の威厳を示すことが目的だったとしたら。研究を重ねて、やっと完成した原爆の効果を試してみたかったからだとしたら。本当の理由が、これらだったとしたらみなさんはどう感じますか。結果的に終戦を早めることができたとしても、原爆投下は間違っていたと考えられるのではないでしょうか。本当の理由は、日本がポツダム宣言を黙殺したからではないとの意見もあります。また、ポツダム宣言の内容が変更されたことは事実です。正確な効果を得るために、予告をせず、人口が多く空襲をあまり受けていない広島に落としたとも考えられています。どれが真意なのかはわかりませんが、どの理由だったとしても、原爆が投下されてしまった事実は変わりませんし、犠牲になってしまったのは、一般の日本国民です。なんの罪もない人々の命が、国の犠牲になってしまったのです。私は、どんな理由があっても、戦争や核兵器など、罪のない多くの人々の命を奪うようなことがこれから絶対に起こってほしくないと強く願います。

ある新聞記事に載っていた若者の言葉に、「戦争によって多くの人が傷ついて、死んだと知ることと、多くの人がどのように傷ついて、死んだと知ることは違う。」と書かれていました。その文章を読んだとき私ははっとしました。教科書などに載っている負傷者数や死者数の数字はただの数字ではありません。その数字一つ一つに人生があり、世界や、国の犠牲になってしまった尊い命だったのです。数の大小が重要なのではありません。どうしてこれほどの数の人がこのような目に遭わなくてはいけなかったのか。どうして遭ってしまったのか。何が起こったのか。しっかりと知ることが重要だと思いました。実際に、原爆によって、一瞬で死んでしまった人。目に見えない放射線を大量に浴び、亡くなった人。熱線によってひどい火傷を負い亡くなった人。熱風によって窓ガラスが全身に刺さった人。家族や友達など大切な人を奪われた人。多くの人が、傷ついて、苦しい思いをした歴史を七十八年経った今でも忘れてはならないと思います。

私は、被爆地である広島県と長崎県を訪れたことがあります。特に、広島県の原爆ドームは、圧倒されたとともに、ただの半壊した建物なはずなのに、原爆投下当時の人々の声が聞こえてくるようでした。この建物で働いていた人は全員即死だったそうですが、その瞬間に何が起こってしまったのかが、建物からすべて伝わってくるようで、恐怖心を抱きました。「負の世界遺産」と呼ばれる原爆ドームから出る雰囲気を多くの人に知ってもらいたいです。

あやまちを繰り返さないためには、まずあやまちを知らないといけません。これからの世界を担う私達が、原爆や戦争についての知識を深めることは平和な世界を創っていくことに最も繋がると思います。経験の共有が共感を作り、その共感が平和を作っていくのです。まずは、知ることから。誰もが安心して生きていける世界を創るために。

体験していない 僕たちができること

愛鷹中学校　三年
植松　洸葵

とある英語の授業。僕は教科書を開いた。原爆ドームの話だ。原爆ドームは七十年以上あの形を保っている。その時は、「なんで戦争なんて起こってしまったのだろうか。」、「何人が苦しい思いをしたのだろう。」そう深く考えていた。

時は経ち、夏休みになった。受験生となり、勉強とスポーツの両立が大変で毎日毎日疲れ果てていた。でも、課題の作文だけは、やる気になった。ずっと平和作文を書こうと決めていた。今日は、八月九日。長崎に原爆が落とされた日だ。僕は小学二年生の頃長崎へと旅行に行った。小さかった頃なので、何も考えず、ただ初めて来たこの地を楽しんでいた。その中でも、とても印象に残っているものがある。長崎原爆資料館だ。周りには、長崎平和公園があった。そのため、小さい僕はただの公園だと思っていた。原爆資料館に入るまでは、なんのために来たのか、何を見に来たのか、いまいちピンときていなかった。街なかを走っている路面電車の音を聞きながら、中に入ると中は一変、静寂に包まれていた。ただ旅行に来た僕には異様な空気感だった。お父さんと一緒に入り口からゆっくりと、そしてじっくりと見て回った。原爆や戦争についてはあまり分からなかったが、危ないものでとても悲惨なものだと理解するのに時間はあまりかからなかった。焼け焦げて、黒くなった手紙の端。原爆が落とされた後の街の様子。見れば見るほど心が痛くなるような資料が多く残されていた。その中でも、特に印象に残っているのが、一枚の女の子の写真と所々破れている服。それは、被爆した子と、その子が実際に着ていた服らしい。自分たちが着ている「服」とは程遠く、どれだけ痛かったか。見ているだけでも伝わってきて、僕の脳裏にしっかりと焼きついた。

そして今、テレビの前にいる。リモコンを手に取り、テレビをつけると原爆についての特集がやっていた。それを見ながら、黙祷をする。テレビの画面の奥にいる人は、大切な人を失ってしまった人。思いのある街がなくなってしまった人。様々な人がいて、その人たちがどれだけ苦しい思いをしたのか、どれだけ悔しかったか、僕たちには計り知れない。けれど、考えることはできると思う。終わってしまったことなので、原因を考えたり、ずっと引きずっていてもなにも進まない。だが、忘れてはいけないことであると思う。僕たちは経験していないが、将来の子供たち、日本に伝えていかなければならない。また、そ

のような悲劇を二度と起こらないようにしていかなければならない。これからの日本を創っていく立場として、もっともっとやれることを探していきたい。

平和を願う

大平中学校　二年
衛藤　雪姫

戦争というものはなぜあるのだろう。本当の平和ってなんだろう。戦争をしたことで何を得ることができただろうか。私には戦争をする意味が分からない。だって戦争をしてしまった後にはきっと誰かが傷ついている。家族や友達を失った悲しみ、とり残されたような孤独感。そして何より戦争に対する憎しみは、どれだけ月日が経っても消えることはないだろう。

今から七十八年前におきた第二次世界大戦では多くの人が犠牲になって亡くなってしまった。八月六日に広島県、八月九日には長崎県に原子爆弾が落とされたのだ。この出来事により、何の罪もない人達の命が奪われた。そして最後は日本が降伏し、この戦争は幕を閉じた。しかし、この戦争で何かを得られたのだろうか。私は、戦争をした国の両者が戦争によって失ったもののほうがはるかに大きかったと思う。自分では「戦争」というものを直接体験したことはないが、絶対におきてほしくない。むしろ、これほど多くの命を無駄にするような戦いがおきてはいけない。

私は以前に『この世界の片隅に』という話をテレビで見た。その話には時限爆弾による被害にあった人の家族の悲しみが描かれていた。やはり、戦争から失った悲しみはずっと残ってしまうんだなと改めて思った。七十八年たった今でも、第二次世界大戦のことをふり返っている番組を見ることがある。今では簡単に「亡くなった」と言葉で表せるが、当時戦争を経験した人達から言うと、きっと一言では表せない苦しみなのだろうと私は思った。戦争を経験したことのない私達子どもと、戦争を経験したことのある大人とでは、同じ「戦争」という言葉を聞いてもその言葉から感じる重みは全く違うだろう。

では、それほどまでに人々を苦しめる戦争はなぜおきるのだろうか。私は現在でも世界の中で戦争をしているという現実がとても残念だと思う。それぞれの国は素敵なところばかりなのにどうして戦いをやめないのだろうか。人には口があるのにどうして話で解決しようとしないのか。戦争をする原因には、欲望などが関係していると思う。人は誰だって自分の意見や思いがある。時に意見の食い違いだってある。それは仕方のないことだ。だけど、どちらかが一歩引けばおさまることだってある。なのに戦争をしてまで何が欲しいのだろうか。同じ人間なのになぜ殺し合わなければいけないのだろうか。自分の欲のためなら周りの人がどうなっても良いのだろうか。そこが人間の怖いところだ。私には理解できない。いや、理解してはいけないことだ。戦争によって奪われるものは、人の命だけではない。動物や植物、自然だっ

てなくなってしまう。それはとても悲しいことだ。

平和ってなんだろう。戦争がなくなることだろうか。差別のない世界だろうか。それとも国と国が仲良くなって大きな問題がなくなることだろうか。考えてみればたくさんうかんでくる。それほど改善してほしいことがあるのかもしれない。だけどそれを改善することはそう簡単ではない。なぜなら、平和を唱えている人はいるのに、この何十年間もずっと同じ問題が続いているのだから。今、世界では平和が叫ばれている。私もできるなら平和になってほしい。過去をふり返っても変えることはできないけれど、未来なら多少時間がかかっても変えることができるかもしれない。「戦争」私は同じ人間として戦争は絶対におこしたくない。もう二度と悲しい戦いはしてほしくない。そして、世界平和を願いたい。同じ地球に生きている一人の人間として。

過去を知り、未来を創る

大平中学校　三年
大　山　由　真

戦争を体験したことがない私達にとって、戦争を学び、知ることは大切なことだ。しかし、どれだけ戦争について学んでも、どこか夢物語のような気分の私がいた。そんな中で英語の教科書で読んだのは、第二次世界大戦中の広島に住む、同じ中学生の日記であった。

彼は、毎日勉強や遊んで暮らしているのではなく、中学生なのに道路清掃作業を十日間行ったり、爆発に怯えたりして暮らしていた。しかし彼は日記の中で常に前向きだった。弱音や悲しみはそこから見えなかった。なぜなら、友達からびわをもらったことや、かくれんぼをしたことなど、大変な状況の中で、ひたむきに生きている姿と沢山の小さな幸せを大切にしている姿しかなかったからだ。

日記の中で、私は彼の「なんて恐ろしい音を立てるんだ。」という爆発をみての言葉が一番印象深い。爆発は当時を生きていた人でも恐ろしく怖かったこと、同じ中学生がそれを目の当たりにしていたことを、現実的に受け止めた。同時に戦争の恐ろしさを現実的に受け止めたとして、私に何ができるのだろうと思った。

今も尚、ウクライナ戦争は続いている。過去を知ることは未来を創ることに繋がる、とても大切なことだが、今起きていることに、まずは目を向けなければならないと思い、私はウクライナ戦争について調べることにした。

そもそもウクライナ戦争が始まったきっかけは、旧ソ連の中でも豊かな国であったウクライナが北大西洋条約機構に加盟しようとしたことだ。ロシアは北大西洋条約機構と対立した関係にあったため、ウクライナの加盟を裏切り行為のように感じ、今回のウクライナ戦争に至ってしまったのではないかと考えられる。

今はニュースで見ることも減って、もう収まったものだと思っていたが、地雷が発見されたり、空襲が起きたりしているようだ。彼が残した日記に書かれていたあの日と同じようなことが、この世界で今も

起こっているということだ。七月二十五日にも二人が死亡し、子供を含む十人が怪我をしたとされている。もう、ウクライナ戦争が始まって五百日以上が経過しているのに、家族を失い、当たり前だった日常に戻れない人々がいるのだ。

世界平和を目指すためには、一九四五年と二〇二三年に同じようなことが起こっているということをもっと多くの人が知り、考えるべきだと私は思う。一九四五年の彼の日記にあった沢山の小さな幸せさえ、八月六日で全て奪われてしまったように、二〇二三年でも沢山の幸せが奪われているということの重要さと残酷さを改めて理解しなければならない。過去から学んだことを未来に活かしていくべきだと私は思う。なぜなら、それが過去からの財産を活かすということだと考える上に、人々が生きた証を後世へ残すことだと思うからだ。

また、世界唯一の被爆国として日本が世界平和に貢献できることは大いにあると思う。例えば彼の日記や戦争の実体験を語る、語り部の人の声を各言語にして世界中の人に発信することができると思う。記念碑や原爆ドームなどの建造物からもその悲惨さは伝わるが実際に体験した人の声が一番、伝わりやすいものだと考える。更には、戦争を体験した人と、体験していない世界中の人々を繋げ、人と人とのつながりを実感できると思うからだ。

しかし、私一人が多くの考えを持ったところで、一人では何もできないというのが現状である。そのため、私の考えを多くの人に伝えるのが大切だと思う。勿論（もち）、私以外にも平和について考えを持っている人は沢山いるし、その考えも様々だ。だからこそ、その考えを発信し、共有しなければならないと思う。

私達は今、毎日平和に過ごしている。それがどれだけ尊く幸せなことなのかを知らなければならない。そして、考えを発信するだけではなく、世界中の人々の何気ない日々を大切に思っていきたい。それが、世界平和へ繋がると信じて。

すべての人に幸せを

大平中学校　三年
金枝　暁

「あなたは幸せですか。」と聞かれた時、私は「はい」と答える。幸せの基準は人によって異なる。ちょっとしたことで幸せを感じる人、他者の喜びの中で幸せを感じる人……今の私は少なくとも幸せを感じている。私の中での幸せの基準は、好きな食べ物が食べられ、行きたい所へ自由に行けることだ。また、私は「幸せイコール平和」だと考える。では、この世界では幸せを感じている人はどれぐらいいるのだろうか。

私は小学四年生の時、家族旅行で広島、長崎の原爆記念資料館や原爆ドームを見学した時、思わず目を覆ってしまった。たった一発の原子爆弾が一瞬のうちに多くの人々の幸せや平和、人命を奪い、都市を壊滅的に破壊してしまった。戦後七十八年経ち、街は復興し更なる発

展を遂げた。人々の生活も便利で快適になった。例えば、日常生活で明日の食べ物の心配もしない。夜に安心して眠れる。こんなことも七十八年前には想像できなかっただろう。しかし、私たちが生活をしている現在で実際に七十八年前のような現実が突きつけられた。

二〇二二年二月、あるニュースが世界中を震撼させた。ロシアがウクライナを攻撃した。そこにあると思っていたあたりまえの日常が一瞬のうちにして崩れ落ちた。この問題はロシアとウクライナだけに留まらず、世界中に波紋のように広がった。これは、戦争が始まって一年半たった今も続いている。最近でも被害状況のニュースが目に入り、その度に私は、人々の中の解決手段として戦争をなくすべきだと強く感じていた。戦争というものは多くの人々からあたりまえの生活を奪い、大切な人までも失ってしまう。本当に戦争をするのが幸せな人がいるのだろうか。そんな人はいるはずがない。攻撃している国も攻撃されている国も多くのものを失っているだろう。誰しもが分かっているはずだ。戦争をして幸せを感じる人なんていない。それならば戦争なんてやめるべきではないのだろうか。本当に戦争なんてあって良いのだろうか。そこで私は、誰しもが「あなたは幸せですか。」という質問に「はい」と答えられる幸せであふれている世の中になってもらいたい。それを叶えるために戦争なんてものは必要ないのである。宗教、文化などの考えの違いから紛争が起こる。考えが人それぞれ違うのはあたりまえであり、相手の考えを取り入れず、自分達の考えが正しいと考えを押しつける。これではお互いにメリットがない。相手を尊重したり、今までよりも広い視野でみたりすることで、一人の考えではできなかったより良いものが生まれるのではないだろうか。

最後に、今の人々と未来の人々の幸せを守るためには、人々の中から戦争という手段をなくすべきである。戦争は多くのものを人々から奪う。私たちが今日本という国で幸せを感じられるのは、昔の人々が経験を活かし、同じ過ちを起こさないという努力があったから。しかし、私たちは経験をしていない。未来の人々の幸せを守るためには、私たちが戦争についてしっかりと学び伝えていく必要がある。誰もが幸せを感じられる世の中をみんなで共につくっていきたい。

戦争に対して私たちができること

長井崎小中一貫学校　九年
葛野　颯太

私は中学三年生になってニュースをたくさん見るようになりました。最近のニュースでとても印象に残っているのが北朝鮮のミサイル発射、ウクライナ戦争のニュースです。その中でも日本と直接的に関わっているものといえば北朝鮮のミサイル発射のニュースですが、私が一番印象に残っているのがウクライナ戦争のニュースです。ウクライナ戦争は今も続いており、毎日、千人近い人が命をなくしたり、怪我をしていて、これまでに約三十五万四千人が死傷しています。私は最初ウ

クライナとロシアが対立関係にあるとニュースの報道で知ったときに「戦争はしないだろう。すぐに終わる」と思っていました。ウクライナ戦争が始まったら毎日ウクライナ戦争のことが報道され、徐々にウクライナ戦争の被害を知りました。泣いている人や怒っている人、私は戦争を体験したことがないので私はそのような気持ちに共感しようとしても共感できません。ただたくさんのニュースを見ていると私も悲しくなってきます。戦争のことを考えていると広島のことを思い出します。

私は戦争に関する資料館に行ったことがあります。広島、長崎の資料館には当時の被害がわかるたくさんの資料がありました。資料館には原爆が爆発した十一時二分をさして止まっている柱時計、この柱時計は爆発地の八百メートル先の民家にあったものですが、八百メートルも離れているのに壊れる当時の被害を見るだけで恐ろしかったです。他にも爆心地から一・二キロも離れている学校の遺壁、破壊された住宅地の写真や人間の手の骨とガラスが高熱のため溶けてくっついているものや、ボロボロの衣服がたくさんありました。それを見るたびに胸が苦しくなって泣きそうになります。周りを見ても暗い表情の人や泣いている人などがたくさんいました。資料館を訪れたのは四年前でしたが、そのときの記憶はとても鮮明に覚えています。それぐらい戦争の衝撃は記憶に残るものだと思います。

二〇二三年、終戦から七十八年を迎えます。今を生きる私たち世代のほとんどは戦争を体験したことがなく身近に戦争を経験している人の話を聞くのも難しくなってきます。このまま時代が進めば戦争の悲劇を繰り返してはいけないという言葉の大切さが薄れていくと思います。その言葉が薄れていくとまた繰り返し戦争をするのではと思うととても怖いです。

私は戦争がなぜ起こるのか考えました。資源を広げたいから、国を守るため、領地を広げたいから。しかし戦争でたくさんの命が失われ、親族の人も悲しみます。どのような目的、理由があっても戦争は決してやってはいけないと思います。私は戦争のために直接なにかできるわけではないですが、戦争について考え、子供ができたら戦争の怖さや戦争をしてはいけないということを教えることが私たちのできることなのだと思います。

ぼくたちが知らなければいけないこと

原中学校　一年
川口宙丈

まず始めにテーマである戦争と平和について考えてみたところ、ぼくは全く戦争というものがなにか知らないと気づきました。

なんとなくテレビから流れてくるニュースで、ウクライナとロシアという国が戦っていることは知っていました。ただなんとなく他人事で、深く考えたこともありませんでした。そこで戦争のことについて

知るためにインターネットで検索していると「静岡平和資料センター」という施設が静岡にあることをしりました。ぼくは夏休み中にそこにいき、戦争というものを学ぶことができました。

そこの施設では実際に昔、日本で起きた戦争に使われた爆弾や当時の人が使っていた物、戦争体験者の人の声などを学ぶことができました。

ぼくの住む町、沼津ももちろん被害にあっていたそうです。空襲という空からの攻撃に使われた、「焼夷弾」という爆弾により九千戸以上の家が焼かれ三百人近くの死者が出たそうです。沼津を空襲した理由は、沼津に軍事施設と軍需工場、港湾施設が多く、東海道本線の重要な分岐点でもあったため攻撃をされたそうです。

戦争相手であるアメリカの攻撃の目的は、日本の戦意をうばうように行っていました。

沼津だけではなく、他にも全国各地も空襲の被害にあい、何人もの命がうばわれてしまいました。その聞いた中でも一番こわかったのが長崎、広島に落とされた「原爆」です。

戦争が終わり、七十八年が経つ今でも原爆被害にあい、後遺症に苦しむ人がいるといいます。まだこの現在、世界でこの原爆を起こせる核をもっている国は、アメリカ、ロシア、フランス、英国、中国、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮と九ヶ国もあるそうです。七十八年前のアメリカと日本の戦争で原爆を落とされた、長崎は約七万人、広島では約十四万人もの人が亡くなっています。

まだ世界に九ヶ国もの国がおそろしい兵器をもっていると思うとぼくはこわいです。

戦争により、ぼくがいつもあたり前に生活できていること、学校でまなぶこと、安全にご飯を食べるという生活が戦争のせいでこんなにも簡単にうばわれてしまうなんて絶対にあってはいけないことだとぼくは思います。

実際に戦争を経験して、覚えている人は九十才を超える人しかいないのだと思います。ぼくのひいおばあちゃんは四年前に八十三才で亡くなってしまいました。だから当時のことを聞くこともできません。

ぼくのように戦争の話を実際に経験した人から聞くことのできなかった人がたくさんの世の中になるでしょう。

戦争のこわさを知らないせいで、また同じことを繰り返してしまうのではないでしょうか。それはあってはいけないことです。

ぼくが思うことは、昔戦争により被害にあった人達の残してくれた言葉をこの先の未来を生きるぼくたちがつなげていかなくてはだめだということです。

そのためにまずは、今回静岡平和資料センターで学んだことを一人でも多く友達に伝えていくのが今ぼくにできることだと思います。

どんどんそれが広まっていくことで一歩でも戦争がなくみんなが幸せに楽しく生きられる世界になればいいなと思います。

核兵器が一日でも早く世界から消えてほしい。今もウクライナとロシアで苦しむ人々が笑える日がくるように一日でも早く戦いが終わってほしい。そうぼくは平和を願っています。

命のバトン

原中学校　二年
篠原　大輔

沼津の港口公園にある、杉原千畝と幸子夫人の碑を見たことがありますか？　杉原千畝の言葉と幸子夫人の歌が刻まれた石碑です。そこにはこう書かれています。

〝私は人として当たり前のことをしたまでです。何も恐れず職を賭してやるべきことを忠実に実行したと今も確信しています〟

杉原千畝とは、ドイツ人の迫害から逃れるユダヤ人のために危険をかえりみず、本国日本の命令に背いてまで、ユダヤ人を救うためのビザを発給した外交官のことです。

夫人であった幸子さんの出生地が沼津であったこと、沼津の親族の家に仮住まいしていたことなど、沼津とのゆかりが深かったことを最近知りました。

ぼくが初めて杉原千畝を知ったのは、小学校低学年の頃彼の伝記を読んだときです。自分が同じ立場であれば権力や自分の将来がどうなるかという恐怖で何もできなかったと思います。そのとき千畝の信念、勇気ある行動を知り、強く感銘を受けたことを覚えています。

千畝は六千人もの命を助けたと言われています。しかし、実際にはそれだけではありません。なぜならその六千人の子孫の数を合わせると、十万人とも言われているからです。それは、世界中のユダヤ人の一パーセントにあたります。救われた六千人から現代まで繋がっている命、まさに「命のバトン」なんだと思います。

ぼくも立場は違いますが、先祖からの「命のバトン」を引き継いでいます。ぼくの高祖父母は、朝鮮半島が日本であった戦時中、鉄道員として朝鮮半島で暮らしていました。日本が敗戦し、朝鮮半島を追われるようにして日本へ逃げてきたそうです。現在の北朝鮮の元山（ウオンサン）という所から、釜山（プサン）まで鉄道で逃げ、そこからは船で日本へと帰ってきたそうです。逃げられなかった人々は捕虜となり、過酷な労働を強いられました。十分な食事も与えられず、栄養失調でたくさんの人々が命を落としたそうです。もしも高祖父母が逃げることが出来ず、命を落としていたら……。「命のバトン」は繋がらず、ぼくはこの世に生まれることはなかったでしょう。今生きている人たちは、「命のバトン」をたくされた大切な存在です。そして今度は、そのバトンを誰かに何かに繋いでいくために、自分たちはさらにこの「命のバトン」を繋ぐ必要があると思いました。

今も千畝の「命のバトン」によって、たくさんの命が繋がっています。そして命を引き継いだぼく達の世代が出来ることは何か。戦争のない平和な地球を、未来の人々へ引き継ぐことなのではないでしょうか。命だけがぼく達を繋ぐのではありません。杉原さんがユダヤ人を救おうとしたのと同じように、平和な地球を願う姿や思いが年齢も国も人種も関係なく、ぼく達を繋いでいくのだと思います。

今も世界のあちこちで紛争や戦争が行われています。その様なニュー

スを目にするたびとても虚しい気持ちになります。
ぼくは高祖父母の話を聞いたことを忘れず語り継ぎ、平和について考える気持ちを持ち続けていきたいです。

沖縄での悲劇

原中学校　二年
土屋　碧人

「ひめゆり学園」という言葉を知っていますか？　僕と同じ位の歳の女の子が通った沖縄の昔の学校のことです。第二次世界大戦中、アメリカ軍が沖縄に攻めてきたことで、ひめゆり学園の生徒の生活が一変したことを、親せきの家で見たＤＶＤで知りました。僕は沖縄が大好きです。海やプールで遊んだり、たくさんのきれいな魚を見たりできる、とても楽しい場所です。そんな沖縄で七十八年前におこった悲しい出来事が気になり、今年の夏、初めて「平和祈念公園」と「ひめゆりの塔」を訪れてみました。

資料館には、当時の様子が詳しく分かるようにたくさんの展示物がありました。例えば、当時の人が砲弾から避難するために隠れていた「ガマ」という場所が再現されていました。一緒に行った妹は、入った瞬間すぐに、

「怖い!!」

と出て行ってしまいました。僕は、作ったものなのに、そんなに怖い？と思いながら、入っていくと、その中はまっ暗で、とても恐怖を感じました。当時の人はその中で銃声も聞こえてきたと考えると、僕の想像を超える恐怖だったと思います。

自分たちの生活環境が変わっただけではありません。ひめゆり学園の生徒達は、負傷した兵士の看護や治療の手伝いをしました。そこでの生活は食べ物に困ることはもちろん、体にわいたウジ虫をとったり、死体を埋めるという辛い仕事も待っていました。目の前で友達が撃たれて亡くなることもありました。アメリカ軍につかまる位ならと自決した人もいました。そんな悲しい歴史を目にして（誰も幸せそうでないのに、何のために、誰のために戦争をしたのだろう。）という気持ちで僕の頭の中は、いっぱいになりました。今まで僕は、戦争があったことは、知っていたし、戦争はしてはいけないものという気持ちもありました。ですが、どこか現実味がなかったように思います。しかし、実際に見て、話を聞いてみて、本当にもう二度と戦争はやってはいけないんだと心から思いました。

ですが、今でもロシアとウクライナは緊迫した状態が続いています。沖縄の平和祈念公園やひめゆりの塔で見たような光景が、実際に今も行われていると想像するととても悲しいです。

また、今、僕たちのクラスは合唱で『HEIWAの鐘』という歌を歌っています。その歌の歌詞の中に「銃声が鳴り響き海や大地が砕け散る」や、「武器を持たぬことを伝えた先人達の声を永遠に語り継ぐのさ」という歌詞があります。僕は沖縄での出来事を知り、より一層理解が深

まり、歌詞にあるように、戦争をしてはいけないという先人達の声を永遠に語り継いでいきたいと思いました。

沖縄には、たくさんの悲しい出来事が詰まっていました。僕は、ひめゆりの塔を訪れた時に、献花をしました。その時、ひめゆりの塔の前にたくさんの献花があることに驚きました。七十八年前の出来事ですが、たくさんの人がここを訪れて、献花をしていました。このたくさんの献花は、多くの人が、この悲しい出来事を胸に刻み、二度と戦争をしてはいけないという強い気持ちの証だと思います。僕もこの気持ちをずっと胸に刻み、戦争のない平和な世界を願い続けたいです。僕がした献花は一束でしたが、たくさんの献花が集まったように、たくさんの願いが集まるといいです。

平和への願い

浮島中学校　二年
渡邊　萌

一九四五年八月六日、午前八時十五分。真っ青な夏空が広がる日でした。それは一瞬で広島の街を何もかも破壊しました。原子爆弾は爆発と同時に強烈な熱線と爆風で人々をおそい、すさまじいエネルギーで発生した上昇気流によって、真っ黒な雨が地上に降り注ぎました。これは放射能を帯びた恐ろしい雨でした。

そして、同じ年の十二月末までに、およそ十四万人もの尊い命が失われました。夢や希望、輝く未来。大切なものをすべて奪い去り、数えきれないほどの大きな悲しみが生まれたのです。

しかし、原子爆弾によって失われなかったものもあります。

それは、生きる希望です。広島の人たちは、原子爆弾によって破壊された廃墟（きょ）の中、心と身体がぼろぼろになっても、どんなに苦しく辛いときでも、生きる希望を持ち続けました。多くの犠牲の上によみがえった広島をもっと輝かせたいという思いで、原子爆弾によって焼け野原になった広島をつくり直してきました。そして今、広島は自然も豊かで沢山の人が行き交う、笑顔あふれるとても平和な街になりました。

昨年、ロシアのウクライナ侵攻が始まりました。この侵攻によってウクライナの多くの都市はミサイルで破壊され、ウクライナの兵士とロシアの兵士だけでなく一般市民までも犠牲になっています。侵攻で親を失った子どもなど、たくさんのウクライナの人たちが、外国への避難を余儀なくされ、私には想像もできない恐ろしい現実が、ウクライナでは今起きています。目の前で大切な人が死んでいく。生まれ育った場所が壊されていく。大切にしていた日常のすべてが消え去っていく。戦争で失うものはあまりにも大きなものです。

ウクライナ侵攻で奪われている命や、原子爆弾や戦争で奪われた命。これらは全て争いがなければ失われることはなかったはずです。

「平和」とはいったい何でしょうか。戦争や争いがないこと。貧困、飢餓がないこと。安心して学校で学ぶこと。人それぞれ考えや思いは

異なると思いますが、今私たちが当たり前に過ごしている日常は「平和」なのだと思います。

では、世界のどこの国も「平和」であるために必要なことは何なのでしょうか。人間は言葉を持っています。自分の考えを相手に伝え、そして相手の考えを受け入れてお互いが心を開いて対話をすることができれば、争いはなくなるのではないでしょうか。

さらに、憎しみや悲しみの連鎖を自分のところで断ち切るために、強さと優しさが必要です。文化や歴史の違いを超えてお互いの違いを認め合い、相手の考えを知ることが大切なのだと思います。

私は今、当たり前のことができる平和な毎日を送っていることに感謝をするとともに、戦争の恐ろしい事実をもっと学んで、世界や後世の一人でも多くの人たちに伝えていく必要があると感じています。

これ以上この世界から大切なものが奪われないで済むように、少しでも早く戦争のない平和な世の中になることを願っています。

色褪せないもの

浮島中学校　三年
渡邉　怜奈

「特攻」この言葉を聞いたことがあるだろうか。「特攻」とは「特別攻撃」の略で簡単にいうと搭乗員が爆弾を装着した飛行機や潜水艇で敵に体当たりする攻撃のことだ。特攻を行う組織のことを人々は「特攻隊」と呼ぶ。その中で有名なのが「神風特攻隊」だ。聞いたことがある人も多いだろう。

私は、社会の授業で特攻隊について学んだ。特攻は必ず死ぬ必死の作戦と言われており、特攻を行った兵士が戻ってくることはない。

では、なぜたくさんの死者が出ることをわかっていながら特攻を行ったのだろう？

なぜなら、日本は空母や空母艦載機を大量に失い、機動力をなくしており、太平洋戦争で優位に立った連合軍には通常の攻撃では対抗できないと判断したからだ。つまり、戦争に勝つためということだ。

私が衝撃を受けたのは、人の命と引き換えに特攻を行ったこともそうだがあと二つある。

一つ目は、特攻を行った兵士の年齢だ。私は、四十代～五十代の人達が行ったのかなと勝手に予想していた。しかし、全ての兵士が二十歳前後の「若者」だったのだ。私の兄は十七歳なので、兄が出兵すると考えたら恐怖でしかない。そんな若者の命は、一回の攻撃で散ってしまったのである。

二つ目は、特攻を行った若者の「考え方」だ。自分が特攻を行う立場の人間だったら、「やりたくない」など、否定的な意見を持つだろう。しかし、当時の特攻隊員の考え方はこうだ。「お国のために、戦争におもむくのは当然、戦場で命を散らすのは名誉なこと」という考え方だ。信じられるだろうか。

「国を守るためにあなたの命をかけてください」そう言われたら、私

ならきっと断ってしまうだろう。なぜなら、戦争に勝てると決まっているわけでもない、自分が命を落としたところで何も変わらないと思ってしまうからである。だったら、生き延びたいと願ってしまう。

戦争に参戦した人に今の世界は平和かと聞かれたら、私は平和だと答えることはできないだろう。なぜなら、戦争や紛争、飢餓、人種差別など、さまざまな問題があるからだ。その問題を解決するためには、まず問題について知り、行動に移してみることが大切だと私は思う。

私は、現在生徒会に所属しており、募金活動を行っている。集められたお金はユニセフなどの支援団体に寄付される。私も少しだが寄付している。このように、自分にできるささいなことからで良い。ささいなことでも、積み重なって少しずつ変化が起きるのだ。現状から一歩踏み出してみる。それが平和への架け橋になるのである。

終戦から今年で七十八年。戦争の記憶はうすれていってしまう。それでも、いつまでも色褪せることなく、人々が願うものがある。それが、世界平和なのである。そう思わせるのは、戦争があり、それを体験し、現代まで語り継いできた人達がいるからだろう。

だから私は、戦争で命を落とした全ての人に、「あなた達の命は無駄ではなかった。あなた達のおかげで世界中の人々が平和な世界を望み、平和な世界が実現した。」そう、胸を張って言える日が来ることを願っている。

託されたバトン

門池中学校　二年
藤島妃那

先日、テレビのニュースで今年終戦七十八年目を迎えたことが報道されていました。ニュースによると、近年は戦争経験者が少なくなっており国民も戦争に対する恐怖が薄れていっているということです。確かに今日本では戦争が起きていないため、戦争がどういうものなのか知らず、戦争に対して恐怖を抱く人があまりいないということは仕方のないことかもしれません。しかし、世界のあちこちではテロや空爆、紛争などで多くの人が命の奪い合いをしています。今一番私達に身近な戦争と言ったら、ウクライナとロシアの戦争ではないでしょうか。新聞には毎日のように「ウクライナ侵攻」という見出しでウクライナとロシアの戦争状況について述べられています。この戦争によって多くの人の命が犠牲になっています。生存者には家族や住まい、大切な人を失ったという怒り、悲しみ、憎しみなどたくさんの感情が心の中に何重にも積み重なっていることでしょう。日本でも七十八年前、このような気持ちの人たちが多くいたと思うととても胸が痛みます。

日本の戦争の発端は一九四一年十二月、日本海軍がハワイ真珠湾に集結していたアメリカ太平洋艦隊へ総攻撃をしかけた「真珠湾攻撃」によるものでした。戦争のきっかけを日本側がつくっていた、と知っ

たときなんでこんなことをしてしまったのだろうととても思いました。この真珠湾攻撃がなければ犠牲になる人も少なく、家族を失って悲しむ人もいなかったかもしれないのです。そこから戦争が始まり一九四二年四月十八日から一九四五年三月十日にかけて東京大空襲、一九四五年八月六日は広島に爆弾が投下され、東京大空襲では約八万四千人が亡くなり、広島原爆が起きてから九日後、日本は負けを認め終戦となりました。

ウクライナとロシアの戦争もいずれ終わる日は必ず来るでしょう。しかし、その時までまた多くの犠牲者を出さないよう今終わらせることはできないのでしょうか。私達子供に戦争を止める、という大きなことはできません。ですが、戦争という恐怖を周囲の人々に伝えることはできます。なぜ、私達の多くの人は東京大空襲や広島原爆について知っているのでしょうか。それは私達が生きている世代にまでその話のバトンをつなげてきてくれた人がいるからです。戦争を体験した人からまた次の人へ、そのまた次の人へと。そのバトンを今度は私達が託されています。どんなやり方でも次世代に生きる人へバトンをつなぐということが大切だと思います。私のように作文で伝えてもいいかもしれません。戦争の残酷さについて、そして平和ということがどれだけ幸せなのかについて。平和は今とこれからを生きる私達にとって一番幸せなことだ、このことに一人でも多くの人が気づいてほしいと思います。

平和

門池中学校　三年
宮口日鞠

一九四五年八月六日、広島に原爆が落とされ、約十四万人の命がなくなった。六十三年後の同日私は生まれた。幼い頃から原爆について母によく話を聞いていた。母の話の中では原爆の恐ろしさについて想像もつかず、他人事のように捉えていた。しかし今年の夏、実際に原爆ドーム、広島平和記念資料館を見学し、原爆の恐ろしさを目の当たりにした。自分自身今まで漠然と考えていたことがあの日本当は何が起こったのか、戦争を防ぐことはできなかったのか考えるようになった。

私は最初に原爆ドームを見学する上で印象に残った、広島に原爆が落とされた原因について着目した。アメリカは当時日本を出来るだけ早く降伏させ、アメリカ軍の犠牲を少なくしたいと考えていた。当時アメリカが考えていた目標都市の中で、唯一連合国軍の捕虜収容所がないと思われていたと同時に、都市の大きさや地形が原爆の破壊能力を実験するために適当であったということが分かった。また、広島平和記念資料館は他国の人々で埋まっていた。それだけ世界の人々がこの戦争のことに注目しているのだ。更に目を引いたのは当時使用していたと考えられる日常生活用品が、黒く焼け焦げた状態で今も尚保存

されている事である。特に灰となったお弁当箱や自転車、カバンや筆記用具など、当時の少年少女が使用していたであろう遺品は、現在の自分自身と重ねることでとても突き刺さるような悲しみを感じた。

投下から四十三秒後の一瞬で十四万人の人が亡くなった。一命をとりとめた人々は苦難な日々を送り、何十年後の今も尚原爆被爆者として戦争の脅威を伝え続けているそうだ。焼け焦げた服や、火傷で苦しむ人々の写真は、原爆の威力と戦争の恐怖を訴え続けているのだと感じた。広島平和記念資料館に一人でも多くの人が訪れ、この悲惨な出来事を知ってほしいと強く感じた。

終戦から七十八年後の今、日本は平和に暮らしているが、未だ戦争をしている国もある。最近よくニュースで耳にするのはロシアとウクライナの戦争だ。この戦争の発端となったのは、二〇一三年欧州連合との政治経済関係を強化する、連合協定をウクライナと結ぶかという事態の渦中、ロシア政府は協定締結をやめるよう当時の大統領を説得した。これにウクライナの国民の多くが大いに反発し、大規模なデモが今に至るそうだ。ロシアによる核の威嚇等により、「核兵器のない世界」への道のりは厳しいものになっている。核兵器のない世界が実現できるよう一人一人の努力が必要だ。そのためには、唯一の戦争被爆国としてこれからも核の恐ろしさを伝え続けていく必要がある。

平和とはなにか

門池中学校　三年
山梨　愛

「平和」この言葉を調べると穏やかでのどかであること、戦争がないことという意味があります。この通りなら今、私達は平和ではありません。私がそう思う理由は二つあります。

一つ目は、ロシアとウクライナで今戦争が起こっていることです。この戦争は二〇二二年二月から始まり、今もまだ続いています。そして、ロシア、ウクライナの両軍合わせて今までに約三十四万四千人が死傷しています。私達はテレビでしか知ることができませんが、街が壊されて、幼い罪のない子供も亡くなってエネルギーや食料の値段も上がり、私達の生活にも支障が出ています。それだけではありません。この戦争の影響を受けて憲法を改正しようという声が上がっています。これは憲法九条「日本国民は正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」というものです。ロシア、ウクライナの戦争によって、いつ他の国でも戦争が起きるか分からないので憲法を改正し、自衛隊が自由に活動できるようにしようという風潮が高まっています。確かに日本はロシア、北朝鮮などに近く、いつ何が起こるか分からない不安定な状況にあります。

現に今も沖縄や日本各地にアメリカ軍の基地があります。

私はこの憲法改正に反対です。なぜなら第一次、第二次世界大戦で日本は戦争を経験し、多くの尊い命が奪われました。そして、戦争は絶対にしてはいけないと戦争を経験した人々から学んだからです。現代に生きる若い世代の私は、実際に戦争を経験していません。だから完璧に戦争を知ること、理解することはもう難しいのかもしれません。だからこそ、戦争を経験した人達が作り上げた、「戦争はするべきでない」という憲法は、大切にするべきだと考えます。そして、その意志を伝えて平和のためにできることを実践していくことが、これからの未来を生きていく私達がすべきことだと思います。

二つ目は、私達の心が豊かでないことです。私はこの作文を書くに当たって『永遠の0』という太平洋戦争の小説を読みました。その中で私がどきりとした言葉があります。戦争が終わってから特攻隊員だった老人が主人公に話したことです。「日本は民主主義の国となり、平和な社会を持った。高度経済成長期を迎え、人々は自由と豊かさを謳歌した。しかしその陰で大事なものを失った。戦後の民主主義と繁栄は日本人から『道徳』を奪ったと思う。今、街には自分さえ良ければいいという人間達が溢れている」今の自分を戒めるような文章でした。今の私は、たくさんのものや家族に囲まれてとても幸せです。しかし、それらの物があり人がいることが当たり前になり、あまり感謝をしていないことに気が付きました。「自分さえ良ければ」というのは相手を顧みない、相手の気持ちを考えないということです。そしてその最たるものがSNS等の誹謗中傷だと思います。見えない相手にも感謝の気持ちを持つことが私達の心を豊かにするコツだと思います。例えば、見えない誰かのために募金をする、ゴミは拾って持ち帰る、「ありがとうの気持ちを伝える」そのようなことがとても大切だと思います。私達一人ひとりが意識を変えて、相手を思いやり、心を豊かにしていくこと。それが戦争をなくすため、平和な未来にしていくために大切なことだと思います。第一歩として、まずは私の心から変えていきたいです。

戦没者の墓

今沢中学校　一年
浅田　衛

昭和十八年二月一日、ガダルカナル島
昭和十九年六月十二日、サイパン島
昭和十九年六月十六日、湖南省
昭和十九年十二月二十日、フィリピンレイテ島

八月十五日、線香の煙がただよう中、墓碑銘から一つずつ年月日、地名、氏名を拾い歩いた。激戦地で亡くなった今沢の人々が十七人も祥雲寺墓地に眠っていることを初めて知った。どのようにして亡くなったのだろう。家族はその時、どれほど涙を流したんだろうと思いをめ

ぐらせた。

終戦から七十八年もの年月が経過した現在、戦時の実際の様子を当事者から聞くことは難しくなってきている。わたしたちが戦争について考える手がかりは、体験者の手記、戦時の映像や写真、現存する構造物にある。

そこで、まず戦争体験者が語った文章を読んでみた。

一九四二年の冬、中国の東北部ハルピンから北に進軍した際、戦車にひかれて亡くなった戦友を回想したものだ。戦友の遺体はまもなく土ぼこりで見えなくなり、その場に放置された。彼の万年筆を密かに抜き取ることしかできなかったという。終戦後に、戦友の妻に形見として万年筆を渡したのだった。つまり、帰国したのはペンだけだったのだ。現在も中国でひそかに遺骨が眠っているのかもしれない。

厚生労働省の戦没者慰霊事業によると、日中戦争と太平洋戦争の海外戦没者は、約二百四十万人とされている。このうち、未収容遺骨は約百十二万柱であるという。約半数が残されたままとなっており、現在も国の事業として遺骨収集が行われている。

調べていくうちに、フィリピンでの戦没者が五十二万人もいるということに驚いた。しかも、このうち未収容遺骨のうち三割以上がフィリピンに残されているということになる。

ということは、フィリピンや太平洋の島で命を落とした今沢の人々の遺骨も戻ってきていないかもしれない。

戦時中の映像や写真も、目にすることができる。特に写真は、個人宅で現在も保存されているものが多いかもしれない。出征記念写真、帰還した兵士の写真、村葬の写真などが残っているようである。明治史料館の企画展図録（『沼津と戦争』二〇〇五年）によると、兵士の遺品として戦地から帰ってきた家族写真が現存しているそうである。

先述の、ハルピンで戦死した兵士の話でも、家族のことを戦友に詳細に語る場面が登場する。兵士が戦地で考え、常に語っていたのだろう。

沼津市内にも、戦時中に建設された施設が多数存在した。沼津駅北の沼津海軍工廠（しょう）跡、第三中学校地にあった海軍技術研究所、足高の拓南錬成所跡、多比の海軍実験場跡、沢田の高射砲台跡、静浦や内浦の海龍格納庫跡、沼津御用邸防空壕（ごう）である。沼津市には、海軍関係の施設が多く存在していたことを知った。

現地に立ち、時代背景と当時の記録を重ね合わせることで、戦時下の状況と未来の平和について考えることができると思う。

沼津市遺族会によると、市内の戦没者数は三千三百八十四人であるという。これらの人々が、いつ、どこで亡くなったかを知ることは大変重要である。南方の見知らぬ島の名前を墓碑から発見する度に、亡くなった人々やその家族のことを想像することができる。戦没者の墓碑銘も「物言わぬ証言者」なのである。

平和を目指して

今沢中学校　二年
稲葉　凛

「脅かすことでしか　守ることができないと繰り返す戦争（つみ）　忘れゆく　愚かな　権力（ちから）よ」

文化祭が近づき、私たちクラスの合唱曲である『HEIWAの鐘』も、少しずつ聴き応えがあるものになってきた。歌詞のイメージが、共通のものになってきたからかもしれない。

「平和」の観念は人によって違う。平和について考えたときふとそう思った。私にとっての「平和」とは、家族と笑いながら食卓を囲むことができることで、学校で友達と笑顔で喋ることで、好きなことを好きなだけできること。もちろん楽しいことばかりではなく、悩みだってあるけれど、それも全部含めて、当たり前の生活を送ることが私の「平和」だ。辞書に書いてある「戦争や紛争がなく世の中が穏やかな状態にあること」というのも、もちろんそうだと思うけれど、一人ひとりのもつささやかな幸せこそが「平和」なのだと私は思う。今は平和ですかと聞かれたら、私自身は平和だと堂々と言うことができるが、日本全体、世界全体で見ると、そうとは言えない。誰かによって幸せが奪われ、家族を失う人、食べること、友達と楽しい時間を過ごすこともままならない人がたくさんいる。その最たるものが「戦争」だ。どうして戦争は起こるのだろう。自分のささやかな幸せの守り方が、人によって違うということなのだろうか。私は、自分も笑顔で過ごしたいと思うけれど、近くの人が笑顔でないと何となく気持ちが沈む。逆に、人の笑顔を見て、幸せな気持ちを味わうことが多い。みんなが笑顔でいてくれたらと願うのは誰しも同じだと思っていた。でも、この歌の歌詞のように、人の幸せを脅かすことでしか、自分の幸せを守れない人がいるのだ。そうでなければ、戦争にはならないはずだ。「戦争」は「平和」の反対語だ。戦争が始まった時点で、戦争を引き起こした人もまた、平和ではなくなる。本末転倒。実に愚かではないだろうか。

ウクライナとロシアの戦争が、ニュースで流れている。最初は怖くて仕方なかったのに、毎日のように流れていると恐怖が薄まってくる。それが一番怖い。当たり前でないことに慣れたくない。この戦争で、両国合わせて三十五万四千人を超える兵士が死傷しているという。幼い子供たちの命も多く失われている。どちらかが勝つまで戦争は終わらないのか。勝ったとしてなんのメリットがあるのか。そもそも、誰のための何のための戦争なのか。どんなに調べても納得のいく答えはどこにもなかった。その中で、ロシアがウクライナとの考えの違いに対して反発したことが事の発端だとする意見がネットに出ていた。過ごしてきた環境や文化の違いで、異なる意見を持って当たり前。国単位なら、その違いは当然大きいだろう。もし、その違いを認め合えないところから戦争が起きたなら、それで命を奪い合い幸せを壊し合うことになっているのなら、ひどい話だ。ニュースを見ていると、なん

となく、感情にまかせて振り上げてしまった拳を、どう下ろしていいかわからないでいるのではないかと思えてくる。

「拳をひろげて　つなぎゆく　心はひとつになれるさ」

戦争が終われば平和になるとは限らない。でも、戦争が続いている以上は、平和には絶対にならない。ウクライナを助けるために、他国が兵器や弾薬を支援している。これは正解なのか。話し合いでの解決はできないのだろうか。価値観の違うもの同士、話し合いは難しいにしても、閉じられたドアをいろんな人がたたき続けることが大事なような気がする。そうでないと互いの拳は開かない。私はどうするべきか。何ができるか。今はその答えはわからないけれど、今起こっていることを自分のこととして捉えながら、しっかり事実を受け止め、仲間と歌っていこうと思う。平和がHEIWAとして世界共通の思いになるように祈りを込めて。

幸せに感謝を

市立高中等部　二年
大野紅亜

突然ですが、質問です。私たちが今生きているこの時代は幸せだと感じますか。私は幸せだと思います。私がこのように感じたキッカケがあります。それは幸せとは何だろうと考えたときに一番に「平和」という文字が頭に浮かびました。今現代、私たちが生きている日本には戦争がなく平和であると言えます。そして日本の昔の時代について興味が湧き、調べてみることにしました。そんなとき、丁度テレビで実際に戦争の時代の方々にインタビューをしている様子を目にしました。私はこのインタビューから感じることがたくさんありました。

今から約百年前のことです。当時、各国は自分の国の勢力を伸ばして植民地を広げたいという思いが複雑に絡み合う状態にありました。そして、第一次世界大戦は「世界的な不況」と「帝国主義」を背景に始まっていきます。

これから話すことは戦争の時代を生きた方々の体験になります。まず一人目は、満蒙開拓団として満州に渡った方です。太平洋戦争前、日本は中国へ進出しました。また、満州国を建国し、満州の広大な土地でとれる資源や食料を我がものにしようとしたのです。その働き手となったのが日本全国から送られた満蒙開拓団でした。この方々は「満州に渡れば豊かな暮らしができる」と聞いて集まりました。

しかし、荒野が広がるばかりで現実は苦しいものだったのです。開拓団は軍隊へお米を出荷していたため、なかなか食事をとることはできず、生きるだけで精一杯の暮らしを送ってきたそうです。そんな中、家族が支えとなっていました。ですが、その生きる希望も失い、家族がどんどん引き裂かれてしまいました。それでもみんなで支え合って生きていたのです。

私がこの時代を生きていたら、逃げ出してしまうかもしれません。戦争の時代を生きていた子供たちは何も悪いことをしていないのに働

かされます。大切な家族や兄弟を失う悲しみや苦しい日々から命の大切さを学ぶことができました。また、この方の自分の過去を見つめる強さなど様々なことを乗り越えて今を生きていることにとても感心しました。

続いて二人目は、終戦後も続く苦難を体験した女性です。一般女性の中に兵士と結ばれた人がいました。その結果「敵兵の子」と呼ばれ、差別された子供もいました。このような子供を預かってきた養護施設、「エリザベス・サンダース・ホーム」というところがありました。ここに集められたのは様々な国にルーツを持った子たちでした。この女性もその一人でした。父親が米兵という理由で母親と引き離されてしまったのです。この施設は要するに〝親子が別れる場所〟でありました。子供からすると離れて悲しいけれど、母親は子供を救済したい、守ってあげたいという思いでこの場所へ預けたのです。

私は、子供は何が起こっているか分からず、ただただ悲しい日々だったかもしれないけれど、母親にも母親なりの考えがあってこの施設に預けることが子供を助ける唯一の方法であったのだと考えます。母親だって子供に会いたくてしょうがなかったと思います。だから、敵兵の子も母も被害者であることをすごく痛感しました。

戦争というものは、罪がない人々の人生を左右したり、心に傷を負わせるものです。だからこそ、戦争の時代を生きた人たちの思いを背負って今を生きる私たちが戦争についてもっと知ること、次の世代にも伝えていくことが「平和」につながっていくのだと思います。平和を守るためにはどうしたら良いのか、自分にできることは何だろうということを見つけていきたいと強く思いました。だから今、朝起きて何事もない一日が始まって、普通にご飯を食べて寝られる、こんなあたり前のことをあたり前だと思わず、毎日感謝の気持ちを持って生活を送っていきたいです。

知覧から

市立高中等部　三年
角田　蓮花

私は母と鹿児島へ行ったことがある。空港に着くと、母はどうしても行きたい場所があると言ってレンタカーを借りた。一時間ほど車に乗ってようやく着いた。車から降りて近くまで行くと、看板の文字が読めた。知覧特攻平和会館、と書いてある。特攻、歴史の資料集で見た言葉だ。いざ、建物の中に入ろうというとき、私は恥ずかしながら一瞬ためらった。戦争を知るのは恐ろしい。何も見ずに立ち去りたいという気持ちに駆られたのだ。私はそのような自分を叱りつけ、勇気を持って中に入った。受付の方が私にパンフレットをくださったため、その文を引用し、知覧特攻平和会館の説明をさせていただく。

「この知覧特攻平和会館は、第二次世界大戦末期の沖縄戦で、人類史上類のない爆装した飛行機もろとも敵艦に体当たりした陸軍特別攻撃隊員の遺影、遺品、記録等貴重な資料を収集・保存・展示して当

時の真情を後世に正しく伝え世界恒久の平和に寄与するものです。」

私が知覧特攻平和会館で見たものは、到底忘れることができないようなものだった。その中でも特に目に焼き付いて離れないのは遺品室の光景だ。私は衝撃を受ける、なんて言葉では表しきれない衝撃を受けた。初めて、その場から足が動かなくなるという経験をした。遺品室の中に入って一番最初に目に入るのは、若い男性の顔、顔、顔。中に入るとバチッと目があった。そのように感じた。とにかく大量の顔写真が部屋の壁を埋め尽くしているのだ。皆、軍服や飛行服を着ていて、軍人であることが分かる。遺品室では陸軍沖縄特攻作戦で亡くなられた千三十六名の隊員の遺影が、出撃戦死した月日の順に掲示されている。名前や位などが写真のそばに書いてある。彼らの顔を最初は上手く見られなかった。この国を守るために逝った彼らをどんな思いで見たらよいか分からなかった。意を決してもう一度目を合わせようというような気持ちで写真を見る。凛々しい表情をされた方、たくましく腕を組んでいる方、柔和なほほえみを浮かべている方、皆爽やかで知的に見えた。なんというか、好青年、という印象である。写真が撮られたときにはもう、死を覚悟していたのだろうか。どんな思いを胸に抱いて写真に写ったのだろうか。一人ひとりの顔写真と名前を見ていくとなんだかはっきりと彼らが生きていたこと、そしてもう、死んでしまったことを感じた。顔写真の下には立体ケースがある。そこには家族・知人に残した遺書・手紙・辞世・絶筆などが展示してある。達筆な人が多く、読むのが少し難しいとも感じたが、文字を見ると、それを書いた人の人柄が伝わってくる。この人は真面目だったのだろう、この人は正義感に溢(あふ)れていたのだろう、この人は本当に優しい人だったのだろう、そんなふうに思いをはせながら読み進めた。私は綴(つづ)られた言葉を読み涙を流し、書いた方の年齢を見てあまりの若さに驚愕(がく)する、ということを何回も繰り返した。明確な意思や強い精神力を感じ、このような人材をこんなに多く失ったことは恐ろしい損失だったのではないか、という思いが離れなくなった。怒りというか、悲しみというか、悔しさというか、はたまた尊敬というか、なんとも言い難い思いでいっぱいになった。その他展示をひと通り見て、出てくる頃には私の顔は涙でぐちゃぐちゃになっていた。

平和が尊いなんて分かりきったことだと思っていたが、私はこの日に初めて、平和を理解したような気がする。戦争を知ることは恐ろしいが、何があったかを知らずに生きていくことのほうがもっと恐ろしい。特攻戦死された方にできる恩返しは、平和な世を作ること、それ以外になにがあるだろう。

ぶたが道を行くよ

市立高中等部　三年
中　村　明暉子

『ぶたが道を行くよ
ぶんちゃっちゃー、ぶんちゃっちゃー

向こうから車が来るよ
ぶんちゃっちゃー、ぶんちゃっちゃー
ぶたは死ぬのが嫌だから
車を避けて行くよ
ぶんちゃっちゃー、ぶんちゃっちゃー』

みなさんはこの歌を聞いて何を思うだろうか。怖い歌と思うか、良い歌と思うか。心から歌いたいと思うか。これは、この歌を生きる希望としていた亡き曽祖父の話。

私の曽祖父は、第二次世界大戦中、水中特攻隊として訓練を受けていた。潜水艦に乗り込み、人間魚雷として敵の潜水艦を攻撃する。もちろん、燃料は片道分しか積まれていない。彼の仲間の中には、お国のためなら死んでも構わないと考える人がたくさんいた。そう教えられてきたし、そうすることが、家族を守ることにもなると信じていたからだ。でも、曽祖父は違った。こんな醜い争いのために命を落としたくないと考えていた。出会って間もない曽祖母と一緒になる約束をしていた。まだ幼い弟や妹を支えてやりたい気持ちもあった。曽祖父は、ここで簡単に死ぬわけにはいかなかったのだ。だが、時は戦時中。このようなことを教官に知られたら最後。非国民とレッテルを貼られ、味方に殺されてしまう。そうわかっていたからこそ、本音を隠し、お国のためと必死に訓練にも耐えていた。

生きて帰りたい――そう思う仲間同士で密かに歌っていたのが、冒頭の『ぶたが道を行くよ』という曲。この曲は三番まであり、向かってくるものが、車、潜水艦、飛行機という順に変わる。作詞者、作曲者は共に不明で、地方によって歌詞や曲調が違うそうだが、元々は手遊び歌らしい。けれど、私には幼児と一緒に歌って踊って楽しむような曲には到底思えない。曽祖父たちは「ぶた」に自分をなぞらえていたのだろう。母が聞いた曽祖父の歌は、「向こうから○○が来るよ」という部分が、車は戦車に、飛行機は戦闘機に歌詞が変わっていた。「ぶたは死ぬのが嫌だから○○を避けて行くよ」。死にたくないから避けて行く。敵が来たら命がけでぶつかって倒してこいという命令が絶対だった当時、この死にたくないから避けて行くという当たり前の言葉に、どれだけ救われただろう。戦争で死にたくない、絶対生きて帰ってやるという思いでこの歌を歌っていたと思うと胸が痛む。幸いにも、彼の出動三日前の八月十五日に戦争が終わり、家族のもとへ帰ってくることができた。歌っていた仲間の何人もが、戦争の犠牲になったと曽祖父は孫である母に話したという。「生きてさえいれば。生きてさえいればそれだけでありがたいことだ。じいちゃんは、仲間の分まで自分の人生を悔いのないよう生きてやるんだ。」

あの忌まわしい戦争のあらましは教科書でわかる。毎年終戦の日に、テレビの特集も見てきた。あの爆弾の、あの空襲の、あの炎のなかにたくさんの人がいて、それぞれの生きてきた歴史も、大事な家族も、愛する気持ちも、輝く未来もみんな灰にしてきたのだ。死が功徳とされる世界があったなど、今の私には想像もつかない。曽祖父が母に伝えた思いと事実を、私は必ず自分の子どもに伝える。それが、もう二度と戦争を繰り返さないために私ができることだと思うからだ。もっともっと多くのことを学んで、それも伝えていきたい。逃げることも、

進むことも、選ぶことも許されている私だから。

父から聞いた祖父の戦争体験

市立高中等部　三年
渡部　紗和

私は父が五十歳の時に生まれました。だから同年代の子のお父さんよりかなり歳を取っています。そのため、父方の祖父は今現在生きていたら、九十四歳ぐらいで十六歳の時に戦争を経験し兵士として戦地に行き戦ったそうです。その時祖父は一人の米兵と出くわし、持っていた銃で撃ち殺してしまい泣きながら近くにあった松の木の下に埋めたらしく、その後何年経っても、物忘れがひどくなってもそのことは覚えていて、病院で自分は人殺しだから天国へ行けないと嘆いていたそうです。父からこの話を聞き、私は何度も何度も人々が唱えてきた〝戦争は何も生まない〟の言葉の真意を理解しました。実際のところ、悲しみや憎しみ、後悔などたくさんの負の念を生みだしていますが、いいことなどは何一つ生まれません。国から無理やり参加させられ、戦っただけなのに、本人たちは自分のことを人殺しだと責めています。戦争で勝った国の兵士も負けた国の兵士もたとえ国からの大義のためだとしても人殺しに変わりないと思いました。私たちに大切な人がいるように殺すよう命じられた敵国の兵士も誰かの大切な人だということを認識して欲しいです。今も続いているロシアとウクライナの戦争も、乗り気ではない人たちが大半だと思います。これだけ戦争はいけないことだと教えても、なぜ世界は仲良くできないのかが不思議です。武器を捨てないのかが不思議です。祖父のように自分は人殺しだと嘆く人が増えるだけだと気付かないのはどうしてなのでしょうか。せめて私たちは、戦争は何も生まないということを伝えていくことが大切で、もし日本が戦争をするとなったときには、反対し戦わないように国を説得することが国民にとっても平和にとっても忘れてはいけないことだと思います。

祖父の話に戻りますが、祖父は広島出身で原爆が起きた当時は戦場にいたため被害は受けなかったのですが、戦争が終わり家に帰ろうとしたときには家がなくなっていました。

がれきなどもないまっさらな土地が残っていたそうです。広島の復興は皮肉にもあまりにもまっさらだったため、想定よりも大幅に速く終わりました。祖父の知人や友人もみな放射線の影響で終戦から五年後には半分程が亡くなってしまったそうです。

戦争といえば原爆のイメージが強いですが、私は原爆以外の戦争体験をあまり聞いたことがありませんでした。だから違った視点で戦争のことをとらえると、相手の米兵がもし先に祖父のことを撃っていたらと考えると急に恐ろしく感じました。私が生まれたのは祖父が相手より早く引き金を引いたからだと思うと、不謹慎ですが、良かったとしか言えません。祖父が生きていたからこそ、私が今ここにいるのです。ですがこのことは私に限らず、皆さんの先祖の人たちにも当ては

まることで、殺し合いの中を生き抜いて今の私たちがいるのです。そう考えると戦争が私たちに関わっていると思いませんか。

私は父から話を聞き、祖父のお陰で今生きているということを認識しました。だから今度お墓参りに行き、お供え物を持ってお礼を言いに行こうと思います。そして、人が殺し合うような戦争を二度と起こさないと、誓いたいと思っています。

平和について考える

暁秀中学校　三年
バーナード　洋人

ぼくは昨年フェンシングの大会の関係で広島県に行きました。時間があったので、かねてから行きたいと強く思っていた原爆ドームに足を運びました。

原爆の破壊力を身近に感じて思ったことがいくつかあります。

まず原爆ドームの造りについてです。当時の広島市内にあった多くの建物とは違って、鉄骨のユニークな造りでした。原爆ドームはもともと「広島県物産陳列館」という広島県の物産品を展示販売する施設でした。ドーム型の珍しい屋根の建物であったため、目印となり狙われたのではないかと思いました。

次に原爆の恐ろしさについてです。たった一つで広島を粉々にしてしまった物がこの地球上にあるということに、ものすごく悲しくなりました。

原爆ドームを見た後、原爆資料館に足を運びました。原爆資料館の中ではたくさんの被爆者の苦しみを見ました。子供から大人まで血まみれになり、体の部分が溶けて地獄のような状態になっていました。

戦後七十八年が経った今、この原爆の怖さはもう終わったことなのでしょうか。ぼくはそうは思いません。現在もウクライナとロシアの戦争など核の脅威にさらされています。

ぼくには、ある記事を読んで気づいたことがあります。令和五年八月十日の朝日新聞の記事によると、広島・長崎に原爆を投下したアメリカの戦闘機「エノラ・ゲイ」のレーダー技師として搭乗していた米兵は、後に「原爆使用は最も非人道的な行いだった。」と孫に話していたそうです。それを聞いた孫は成長してから、度々広島や長崎に行くようになり原爆の被害者の孫と非核への意志でつながりました。

原爆投下の瞬間、キノコ雲の上と下にいたそれぞれの孫は、今は「同志」になり、核兵器がない世界を強く願っています。

ぼくは、この記事を読んで強く心をうたれました。そして核兵器のない世界を作るにはまず関係性を築かなければならないと思いました。それは過去の戦争のことだけではなく今のウクライナとロシアの戦争でも言えることだと思います。ぼくたちもお互いのことを知り、よい関係を築くことで、紛争をなくす第一歩を踏み出していきたいです。